仙台市文化財調査報告書第63集

史跡 陸奥国分寺跡

昭和58年度環境整備予備調査概報

南大門跡東脇築地跡

1984・3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第63集

史跡 陸奥国分寺跡

昭和58年度環境整備予備調査概報

南大門跡東脇築地跡

1984・3

仙台市教育委員会

序　　文

史跡陸奥国分寺跡の環境整備事業は、これまで主要伽藍の各遺構の整備が終了し、市民一般に公開されて以来、散策、写生会等に親しまれ、活用されてまいりましたことは誠に喜ばしい限りであります。

陸奥国分寺跡は日本に数ある国分寺跡の中でも最北端に位置し、往時の古代国家の国づくりにおける東北支配にかけた威信と、古代東北の開拓の歴史を知る上に最も重要な史跡であります。約10万㎡にも及ぶ広大な寺域は、中央から派遣された数百人、ある時には一千人もの名僧や学僧等が国の安泰を祈願したところでもあり、辺境の地に忽然と咲いた国の華でもあったのであります。

こうした遺跡の重要に鑑み、仙台市教育委員会は、近年来、積極的に土地の公有化を図り、遺跡の保護、保存、活用にむけて努力してまいったところであります。

今年度も文化庁、県の御助力により、民地２ヶ所の公有化を進めてまいりました。特に南大門跡東方に一定の面積が確保できたことにより、南辺築地跡の遺構の保存状況、築地の規模、構造等々の基本資料の収集を目的とした発掘調査を実施し、今後の整備事業を展望する好資料を得ました。

本報告書は、こうした調査の成果をまとめ、公開するものであります。本書が学識者はもとより、市民一般の目にとまり、文化財の保護ならびに啓蒙、活用、継承に役立てていただけるならば望外の喜びであります。

今後の文化財行政に格段の御支援を願って序といたします。

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、国庫補助事業（総額600万円）の環境整備事業に伴う、史跡陸奥国分寺の南大門跡東脇築地跡の発掘調査概報である。

2．本概報は、調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　青沼一民……Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ1、2、3・Ⅴ

佐藤甲二……Ⅳ3

遺構トレース　熊谷信一、横山広美

遺物実測　阿部多津子、庄子敦、臼井美津子、斎藤美智子、横山広美、佐藤幸子、菅原恵美子、金沢君代、吉田康子

遺物トレース　横山広美、吉田康子、阿部多津子

遺構写真撮影　青沼一民、佐藤甲二、庄子敦

遺物写真撮影　佐藤甲二、菊池豊、熊谷信一

遺物拓影　金沢君代、阿部多津子、石川勝子

図面整理　熊谷信一、庄子敦

遺物復元　石川勝子

編集は、青沼・佐藤（甲）がこれにあたった。

3．本報告の実測図・文中の方位は磁北で統一した。

4．本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・佐原：1970）を使用した。

5．陸奥国分寺跡の遺構略号を次の通りとした。

SD　溝跡　　SK　土壙　　SF　築地跡

6．遺物の分類略号は次の通りとした。

C	土師器（非ロクロ）	H	その他の瓦
D	土師器（ロクロ使用）	J	陶磁器
E	須恵器	K	石器・石製品
F	丸　瓦	N	金属製品
G	平　瓦	P	土 製 品

本　文　目　次

序　　文
例　　言
Ⅰ．調査の要項…… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境…… 3
Ⅲ．調査に至る経過…… 3
Ⅳ．調査の概要…… 9
　1．基本層位…… 9
　2．発見遺構……10
　3．出土遺物……17
Ⅴ．ま と め……39
　付　　章……41

表　目　次

第1表　陸奥国分寺跡発掘調査略歴表…… 4
第2表　出土文様瓦分類表……17
第3表　軒丸瓦観察表……27
第4表　古銭観察表……36

図　目　次

第1図　周辺の遺跡…… 2
第2図　調査地点位置図…… 5
第3図　遺構配置図…… 7
第4図　築地跡・溝跡平面図…… 9
第5図　築地跡断面図……10
第6図　築地崩落土上面遺物出土状況平面図…11
第7図　SK－3・5土壙遺物出土状況平面図…13
第8図　SK－3・5 土壙断面図……14
第9図　SD－2溝跡遺物出土状況平面図…15
第10図　SK－4土壙平面図・断面図……16
第11図　出土遺物土師器・須恵器……18
第12図　出土遺物土師器・陶磁器……19
第13図　出土遺物軒平瓦(1)……20
第14図　出土遺物軒平瓦(2)……21
第15図　出土遺物軒平瓦(3)……22
第16図　出土遺物軒平瓦(4)……23
第17図　出土遺物軒丸瓦(1)……24
第18図　出土遺物軒丸瓦(2)……25
第19図　出土遺物軒丸瓦(3)……26
第20図　出土遺物軒平瓦……27
第21図　出土遺物平瓦(1)……28
第22図　出土遺物平瓦(2)……29
第23図　出土遺物丸瓦……30
第24図　出土遺物文字瓦……32
第25図　出土遺物砥石・硯……35
第26図　出土遺物古銭拓本……37

図　版　目　次

図版１　調査前全景……43
図版２　調査区全景……43
図版３　築地跡全景……43
図版４　築地崩落土上面遺物出土状況……44
図版５　SK－３土壙遺物出土状況……44
図版６　第Ⅳ層上面遺物出土状況……44
図版７　SK－５瓦溜め遺構遺物出土状況…45
図版８　築地跡上面瓦出土状況……45
図版９　SK－５瓦溜め遺構遺物出土状況…45
図版10　築地崩落土上面遺物出土状況……46
図版11　SD－２溝跡遺物出土状況……46
図版12　SD－２溝跡遺物出土状況……46
図版13　SD－２溝跡遺物出土状況……46
図版14　文字瓦出土状況……47
図版15　均整唐草文軒平瓦出土状況……47
図版16　偏行唐草文軒平瓦出土状況……47
図版17　重弁蓮華文軒丸瓦出土状況……47
図版18　SK－５瓦溜め遺構断面……48
図版19　築地跡基底部断面……48
図版20　旧トレンチ……49
図版21　SK－３・５完掘全景……49
図版22　現地説明会風景……49
図版23　出土遺物　平瓦・丸瓦……50
図版24　出土遺物　軒平瓦……51
図版25　出土遺物　軒平瓦……52
図版26　出土遺物　軒平瓦……53
図版27　出土遺物　軒丸瓦……54
図版28　出土遺物　軒丸瓦……55
図版29　出土遺物　軒丸瓦……56
図版30　出土遺物　文字瓦……57
図版31　出土遺物　道具瓦・平瓦・近世瓦……58
図版32　出土遺物　陶磁器・石製品・土製品・鉄滓……59

Ⅰ. 調 査 の 要 項

調査目的　南大門跡東脇築地跡一帯の環境整備に先行し、南辺築地跡の位置、範囲、及び、外郭南辺外の関連施設の調査を目的とする。

調査面積　約140㎡　（仙台市木ノ下三丁目74）

調査期間　昭和58年9月26日～11月15日

調　査　体　制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

課　　長　　永野　昌一

主　　幹　　早坂　春一

文化財調査係　　係長　佐藤　　隆

文化財調査係　　教諭　青沼　一民

　　主事　佐藤　甲二

文化財管理係　　係長　大沢　隆夫

　　主事　山口　　宏、岩澤　克輔

調査指導　伊東信雄（仙台市文化財保護委員、陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北学院大学教授）

坪井清足（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、奈良国立文化財研究所所長）

高橋富雄（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北大学教授）

坂田　泉（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北大学助教授）

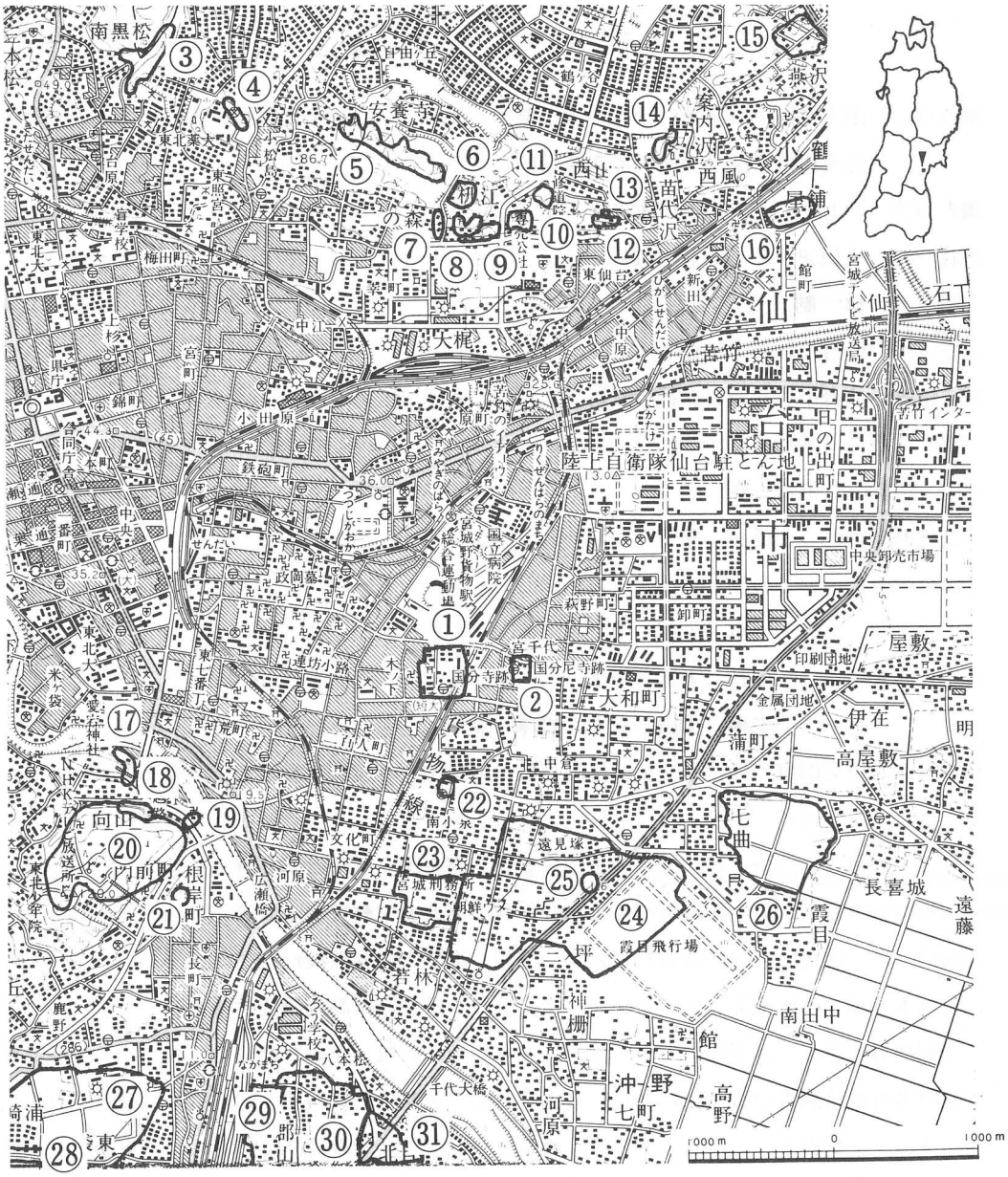
佐々木光雄（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、多賀城跡調査研究所所長）

発掘調査に際して、下記の方々、諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

宮城県多賀城跡調査研究所　白鳥良一・高野芳宏、東北歴史資料館　岡村道雄、奈良国立文化財研究所　上原真人、名古屋大学教授　楢崎彰一、立正大学教授　坂詰秀一、前東北大学教授　芹沢長介、宮城県教育庁文化財保護課　藤沼邦彦・佐々木和博・手塚均、東北大学農学部助手　山田一郎、仙台育英学園高等学校教諭　渡辺泰伸、古川工業高等学校教諭　鷄田勝彦

発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々の協力を得た。

熊谷信一、中野裕平、菊池豊、庄子敦、村上令子、浅見礼子、大山のり子、臼井美津子、阿部多津子、斎藤美智子、横山広美、佐藤幸子、菅原恵美子、金沢君代、吉田康子、石川勝子、



No.1．陸奥国分寺跡
2．陸奥国分尼寺跡
3．五本松窯跡
4．南光沢窯跡
5．与兵衛沼窯跡
6．枡江遺跡
7．二ノ森遺跡
8．神明社裏遺跡
9．神明社窯跡
10．土手前窯跡
11．安養寺窯跡
12．大蓮寺窯跡
13．案内古墳
14．善応寺横穴群
15．燕沢遺跡
16．小鶴城跡
17．愛宕山横穴群
18．大年寺山横穴群
19．宗禅寺横穴群
20．茂ヶ崎城跡
21．兜塚古墳
22．法領塚古墳
23．若林城跡
24．南小泉遺跡
25．遠見塚古墳
26．仙台東郊条里跡
27．富沢水田遺跡
28．泉崎浦遺跡
29．西台畑遺跡
30．郡山遺跡
31．北目城跡

第1図　周辺の遺跡

Ⅱ．遺跡の位置と環境

陸奥国分寺跡は、仙台市木ノ下三丁目に所在している。本遺跡は、仙台市の東南部、国鉄仙台駅から東方へ2.5㎞の所である。地形を概観すると、名取川水系広瀬川流域に形成された自然堤防上に位置している。西側は下町段丘、及び、海岸平野最奥部の境にあたり、付近は市の東方に広がる仙台平野の西地端に当る広い平地である。東方約8㎞には太平洋が望める。標高は、15～16m程である。本遺跡周辺は、十数年前まで長く畑地として利用されていたが、近年は市街地となっている。

陸奥国分寺跡周辺の遺跡を観ると、まず南方1.0～1.5㎞には、古墳時代中期の東北地方第3位の大きさを誇る前方後円墳の遠見塚古墳、後期の法領塚古墳等の大小の古墳群を成形している。また北方の丘陵地帯、台の原、小田原丘陵には、5世紀の須恵器を出土した遺跡として有名な大蓮寺窯跡、また瓦窯跡である安養寺下窯跡、安養寺中囲窯跡、枡江遺跡、蟹沢中窯跡、与兵衛沼窯跡、五本松窯跡、神明社窯跡等があり、瓦、須恵器だけでなく、丘陵上には土師器、鞘火口の散布もみられること等から他の生産も行なわれていたことが考えられる。現在も丘陵西端の堤町には、堤焼の窯があり、古から窯業に適した地として知られている。さらに陸奥国分寺跡から7㎞付近には、陸奥国府多賀城及び多賀城廃寺があり、陸奥国分寺跡、同尼寺跡等を含め、奈良時代～平安時代を通じ、これらの官衙、寺院等に瓦を供給した大窯跡地帯として開らかれていたことが考えられる。

Ⅲ．調査に至る経過

陸奥国分寺跡は、白山神社付近一帯を中心に布目瓦が散布し、塔の礎石の存在等によって、早くから世に知られ、大正11年10月12日に史蹟名勝天然記念物法によって史跡に指定された。

史跡指定以来、昭和30年まで学術的調査は行なわれてなく、陸奥国分寺跡の性格、規模等の詳細が知られていなかった。

昭和30年に史跡指定地内で開発行為よる現状変更を機に初めて、学術的調査が行なわれた。調査は昭和30～34年までにおよび、一連の調査のなかで果たした役割は大きく、調査によって、全国的にみても遺存状況の極めて良好な、東大寺式伽藍の存在が確認された。

陸奥国分寺は、当時の尺度で800尺（約242m）四方の寺地を区画したものと考えられ、寺地の南北中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊を配し、金堂と中門を廻廊で結び、金堂、講堂間の東西に鐘楼、経楼を、金堂の真東に七重塔を置き、塔にも廻廊をめぐらすという伽藍配置をとることが明らかになった。また外郭施設は築地、門、掘立柱列、溝などによって区画されていることが確認されている。このように七堂伽藍を兼ね備えた本格的な寺院で、国分寺

は、方二町をもって標準的なものとされているが、陸奥国分寺は規模として、大きいものと思われる。

またその後、陸奥国分寺跡周辺は、宅地化の進展により、遺跡を保護する目的で、昭和43年度から土地の買収、公有化に着手しており、地下に埋没している遺構を地上復元するなどの一連の環境整備事業を昭和47年度より実施している。

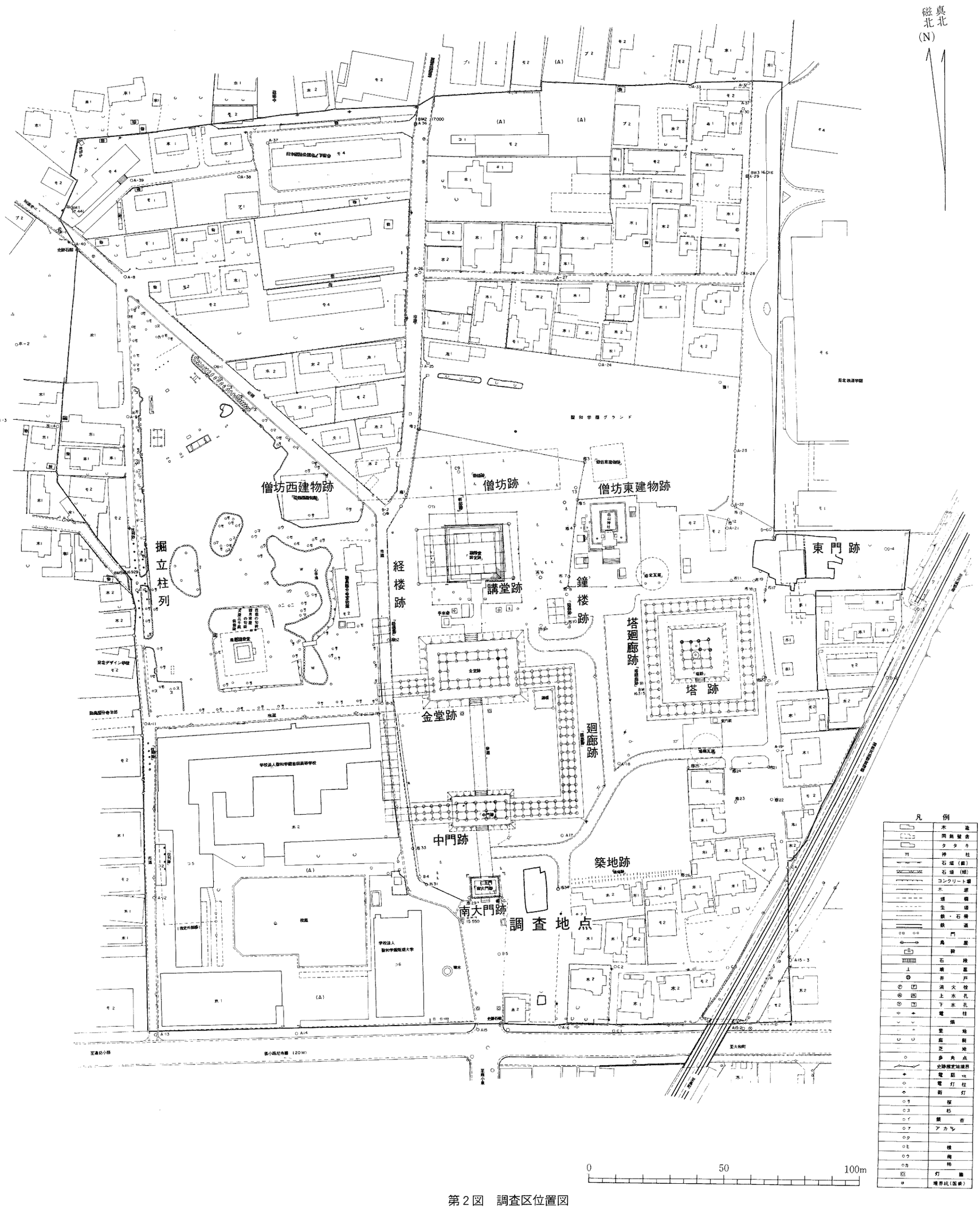
第1表　陸奥国分寺跡発掘調査略歴

※個人住宅建築に係わる10㎡未満の試掘調査を除く。

年　度	調　査　区　別	発　掘　調　査　地　区	調査面積	
昭和30年度	学術調査(第一次)	金堂跡、廻廊東半、塔跡西辺、塔南瓦溜	約 4,000㎡	
31	〃　(第二次)	講堂跡、中門跡、廻廊跡西半、南大門跡、鐘楼跡、経楼跡 軒廊跡、僧坊跡の一部		
32	〃　(第三次)	僧坊跡、准胝観音堂付近遺跡、塔跡、塔廻廊跡		
33	〃　(第四次)	塔跡、塔廻廊跡南辺、東門跡、僧坊西建物跡の一部		
34	〃　(第五次)	僧坊西建物跡、僧坊東建物跡、西境界線上の掘立 柱列跡、講堂跡根石、北門跡の推定地		注1
42	現状変更事前調査	東北部（外囲溝）	約　120㎡	
47	環境整備(第一次)	塔院廻廊跡	150㎡	
48	〃　(第二次)	塔院廻廊跡、僧坊跡、南辺築地跡	240㎡	
49	〃　(第三次)	中門跡、金堂跡、廻廊跡、僧坊跡	344㎡	
50	現状変更事前調査	西南部（築地・中世掘立柱建物）	1,010㎡	
53	〃	南東部	112㎡	
54	〃	西南部、准胝観音堂付近遺跡・東北部	1,180㎡	
55	環境整備(第四次)	東門跡	約　400㎡	注2
57	現状変更事前調査	西側寺域外部	約　70㎡	注3
58	環境整備(第五次)	南大門東側築地跡	約　140㎡	注4

注1　「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　1961
注2　史跡陸奥国分寺ー昭和55年度環境整備予備調査概報ー仙台市文化財調査報告書　第27集 1881．3
注3　仙台平野の遺跡群Ⅱ　仙台市文化財調査報告書　第47集　1983．3
注4　史跡陸奥国分寺東脇築地跡発掘調査現地説明会資料　1983．11．5

環境整備を実施するにあたり、調査成果を復元設計の基礎資料にするため、その予備調査が行なわれ、昭和48年度には塔跡、昭和55年度には、東門跡及び、それに関係する遺構確認の調査を行なっている。本年度は、南大門跡東脇築地跡の確認とこれに関連する遺構確認の調査を行なった。


真北
磁北
(N)
僧坊西建物跡
僧坊跡
僧坊東建物跡
掘立柱列
経楼跡
講堂跡
鐘楼跡
東門跡
塔廻廊跡
塔跡
金堂跡
廻廊跡
中門跡
築地跡
南大門跡
調査地点
聖和学園グランド
凡例
0
50
100m

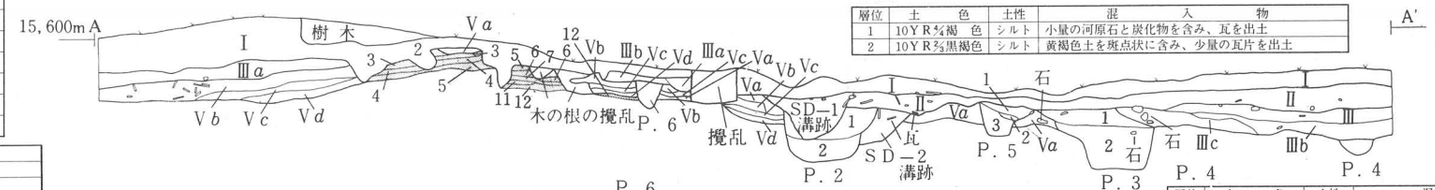
第２図　調査区位置図

東壁セクション図

層位	土色	土性	混入物
Ⅰ	現表土		ガラス等が含まれる。木ノ根による攪乱が多い
Ⅱ	7.5YR4/4褐色	シルト	礫、炭化物、ガラスを含み、近代瓦を出土 木ノ根による攪乱が多い
Ⅲa	10YR4/4褐色	シルト	礫、河原石を含み、古瓦近代瓦を出土
Ⅲb	10YR3/3黒褐色	シルト	河原石、古瓦を出土
Ⅲc	10YR3/3褐色	シルト	明褐色土をブロック状に含む
Ⅳa	10YR4/4にぶい黄橙色	シルト	灰白色火山灰を含む
Ⅳb	10YR3/3暗褐色	シルト	瓦、礫、炭化物を含む
Va	10YR3/3暗褐色	シルト	明褐色土を微粒子状に含む
Vb	10YR3/3黒褐色	シルト	褐色土をブロック状に含む。炭化物、河原石を含む

版築土層

層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3黒褐色	シルト	微粒子の小石を含む
2	10YR5/6黄褐色	シルト	
3	10YR3/3黒褐色	シルト	
4	10YR3/3黒褐色	シルト	
5	10YR3/3黒褐色	シルト	
6	10YR5/6明黄褐色	シルト	
7	10YR7/6黒褐色	シルト	
8	10YR3/3暗褐色	シルト	若干の暗褐色土をブロック状に含む
9	10YR3/3褐色	シルト	微粒子の小石を含む。暗褐色土をブロック状に含む
10	10YR4/6褐色	シルト	微粒子の小石を含む。暗褐色土を含む、礫を含む
11	10YR4/6褐色	シルト	黄褐色土を斑点状に含む。礫を少量含む
12	10YR4/4暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土を含む
13	10YR3/3暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土黒色土をブロック状に含む



Pit 2

層位	土色	土性	混入物
1	10YR4/4褐色	シルト	小量の河原石と炭化物を含み、瓦を出土
2	10YR3/3黒褐色	シルト	黄褐色土を斑点状に含み、少量の瓦片を出土

SD−1 溝跡

層位	土色	土性	混入物
1	10YR4/4褐色	シルト	多量の炭化物を含み、古瓦、近世瓦を出土する(近世)

SD−2 溝跡

層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3黒褐色	シルト	暗褐色土を微粒子状に含み、炭化物も含む、瓦を出土

P. 6

層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3黒褐色	シルト	明黄褐色土を斑点状に含む

P. 3

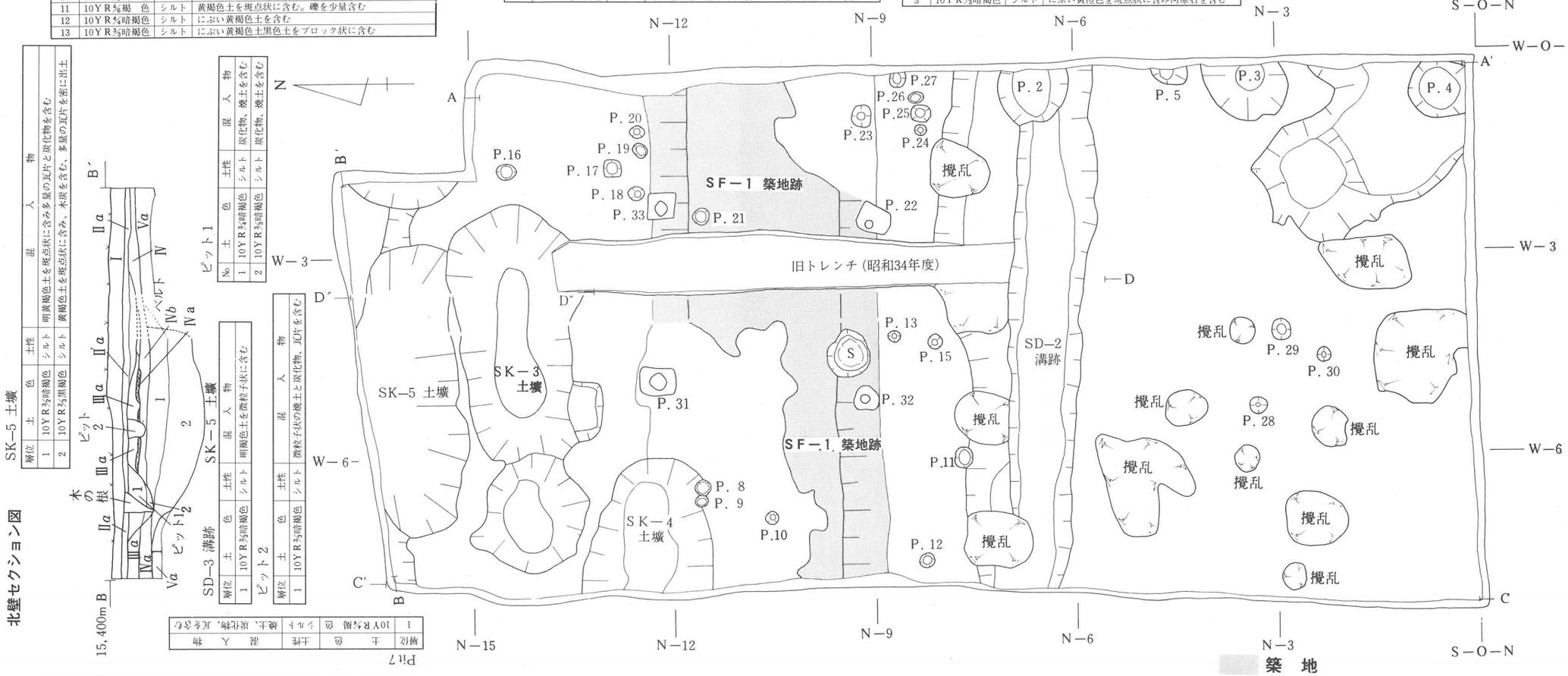
層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3暗褐色	シルト	河原石、瓦を含む
2	7.5YR3/3暗褐色	シルト	炭化物を含む
3	10YR3/3暗褐色	シルト	にぶい黄橙色を斑点状に含み河原石を含む

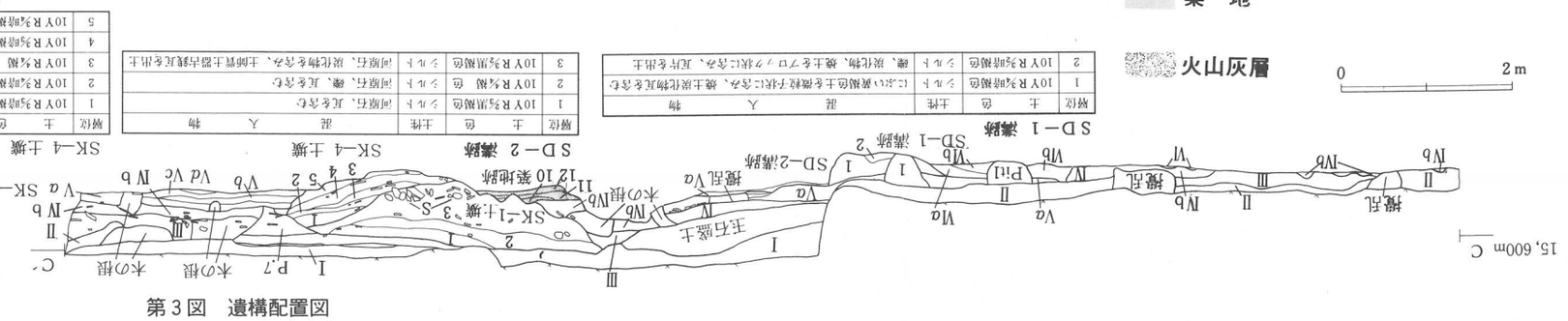
P. 4

層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3暗褐色	シルト	河原石を含み、瓦を出土する

P. 5

層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3暗褐色	シルト	瓦を出土する
2	10YR3/3暗褐色	シルト	褐色土を斑点状に含む
3	10YR3/3黒褐色	シルト	微粒子状の小石を含む





第3図　遺構配置図

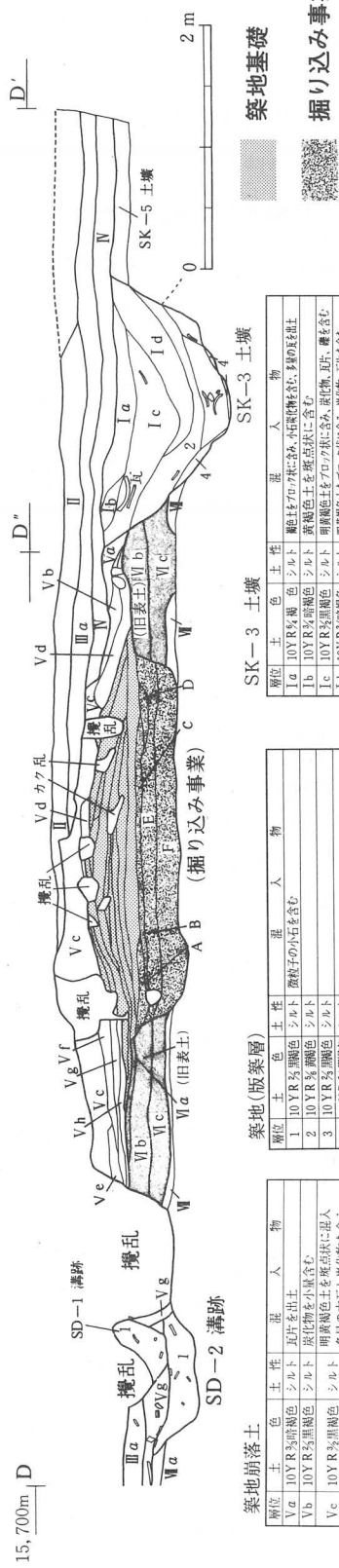
Ⅳ. 調 査 の 概 要

陸奥国分寺跡寺域の南方に位置する仁王門は、慶長12年(1607年)、伊達政宗によって建立された八脚門である。昭和31年の調査では、仁王門の位置に、陸奥国分寺跡南大門の存在が確認された。また南大門跡の東方には、土塁状の高まりが、陸奥国分寺に関連する施設と考えられていた。現仁王門の東方に僅かに高まりを有する部分に調査区を設定した。調査区は、東西幅8ｍ、南北幅15m程である。

1. 基 本 層 位

陸奥国分寺跡の基本層序は、表土下30～40cmで整地層が検出され、主として３層に分けられ白色シルト、暗褐色土、褐色土からなる。整地層下は、締まった黒色土の旧表土が検出される。さらに細かく締った黄褐色粘土層が20～30cm検出され、その下層に厚い砂礫層がある。

第４図　築地跡・溝跡平面図



築地基礎

掘り込み事業

旧 表 土

SK－3 土壙

層位	土色	土性	混入物
Ⅰa	10YR5/4褐 色	シルト	褐色土をブロック状に含み、小石炭化物を含む、多量の瓦を出土
Ⅰb	10YR3/4暗褐色	シルト	黄褐色土を斑点状に含む
Ⅰc	10YR3/3黒褐色	シルト	明黄褐色土をブロック状に含み、炭化物、瓦片、礫を含む
Ⅰd	10YR3/4暗褐色	シルト	明黄褐色土をブロック状に含み、炭化物、瓦片を含む
Ⅰe	10YR3/3暗褐色	シルト	黄褐色土を微粒子状に含む
2	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を微粒子状に含む
3	7.5YR5/3褐 色	〃	炭化物礫、多量の瓦片を含み、鉄滓を出土
4	10YR2/3黒褐色	〃	明黄褐色土を含み、炭化物を含む

掘り込み事業

層位	土色	土性	混入物
A	10YR3/4暗褐色	シルト	褐色土を含む
B	10YR2/3黒褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む
C	10YR3/4暗褐色	シルト	黒褐色土を含む
D	10YR3/4暗褐色	シルト	褐色土を含む
E	10YR2/2黒褐色	シルト	褐色土、黒褐色土を含む
F	10YR2/2黒褐色	シルト	褐色土をブロック状に含む

築地(版築層)

層位	土色	土性	混入物
1	10YR3/3黒褐色	シルト	微粒子の小石を含む
2	10YR3/3褐色	シルト	
3	10YR3/3黒褐色	シルト	
4	10YR2/3黒褐色	シルト	
5	10YR3/3黒褐色	シルト	
6	10YR3/4暗黄褐色	シルト	
7	10YR2/3黒褐色	シルト	若干の暗褐色土をブロック状に含む
8	10YR2/3暗褐色	シルト	微粒子の小石を含む、暗褐色土をブロック状に含む
9	10YR3/3褐 色	シルト	微粒子の小石を含む、暗褐色土を含む、礫を含む
10	10YR3/4褐 色	シルト	黄褐色土を斑点状に含む、礫を少量含む
11	10YR4/4褐 色	シルト	にぶい黄褐色土を含む
12	10YR3/3暗褐色	シルト	にぶい黄褐色土、黒褐色土をブロック状に含む
13	10YR3/3暗褐色	シルト	

築地崩落土

層位	土色	土性	混入物
Ⅴa	10YR3/3暗褐色	シルト	瓦片を出土
Ⅴb	10YR2/3黒褐色	シルト	炭化物を少量含む
Ⅴc	10YR3/2黒褐色	シルト	明黄褐色土を斑点状に混入 多量の瓦と炭化物を含入
Ⅴd	10YR3/3暗褐色	シルト	少量の明黄褐色土と礫を含む
Ⅴe	10YR3/4暗褐色	シルト	少量の炭化物と礫を含む
Ⅴf	10YR3/3暗褐色	シルト	
Ⅴg	10YR6/6明黄褐色	シルト	暗褐色土を斑点状に含み、多量の瓦を含む、焼土及び炭化物を混入
Ⅴh	10YR3/4暗褐色	シルト	暗褐色土、黄褐色土を含み、礫と多量の瓦を含入

旧 表 土

層位	土色	土性	混入物
Ⅳa	10YR2/2黒褐色	シルト	微粒子の礫と少量の炭化物を含む
Ⅵb	10YR2/2黒褐色	シルト	礫を含む
Ⅵc	10YR2/3黒褐色	シルト	
Ⅶa	10YR4/6褐 色	粘土質シルト	
Ⅶb	10YR4/4褐 色	粘土質シルト	

第５図　築地基礎関係断面図

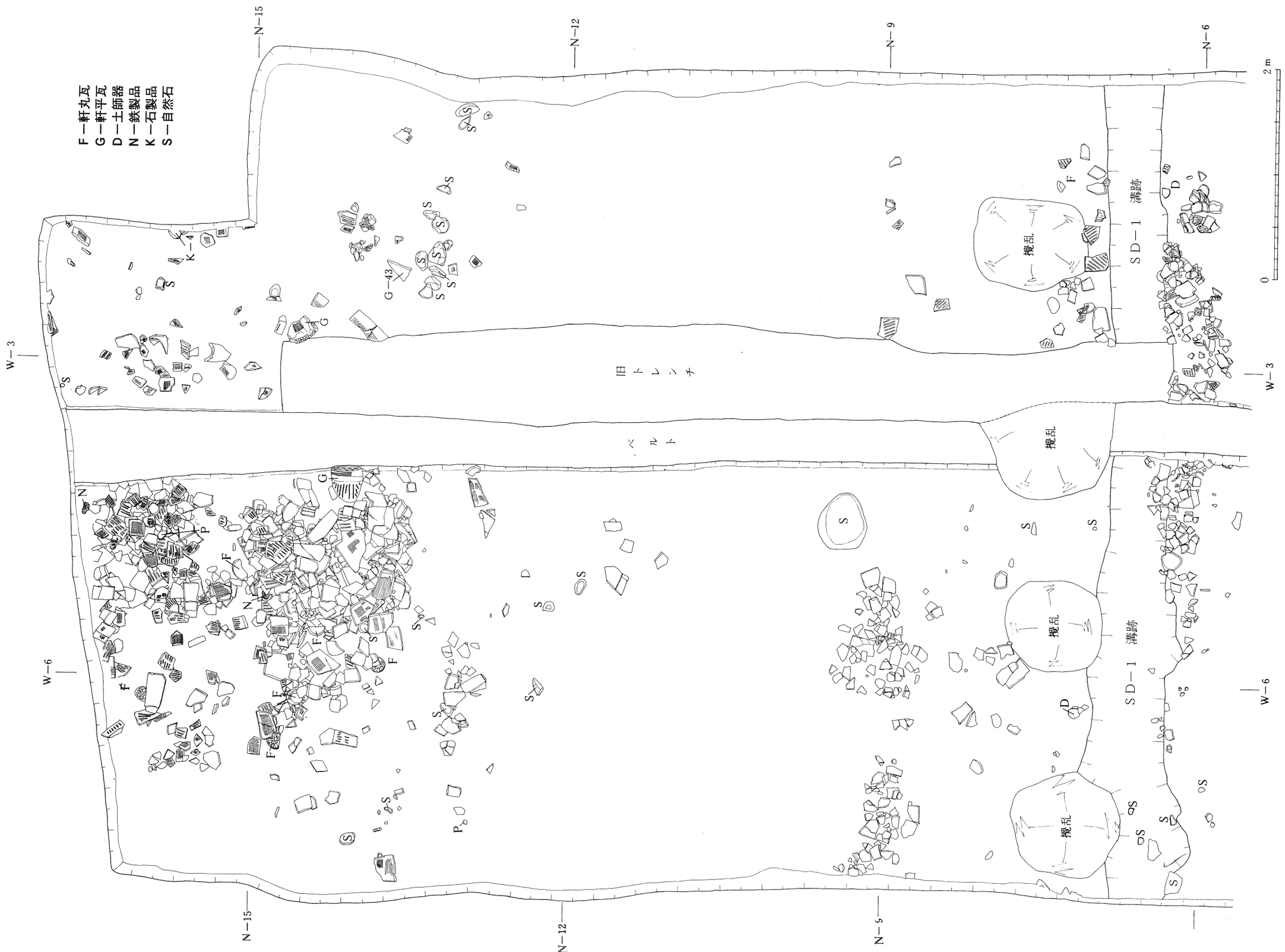
本調査区は、南大門跡から真東の所に設定し、現状は、築地跡と思われるところが土塁状に盛り上がっている。表土を排土すると中央部分で、築地跡が検出された。また調査区南半は、排土すると、黄褐色粘土層、一部砂礫層が検出され、旧表土が削平されている。調査区北半は、表土から厚さ60cm程で第Ⅵ層の旧表土が検出され遺存状況が良好である。また北壁断面のⅣ層上面では、厚さ、５cm程の灰白色火山灰層が堆積している。

２．発 見 遺 構

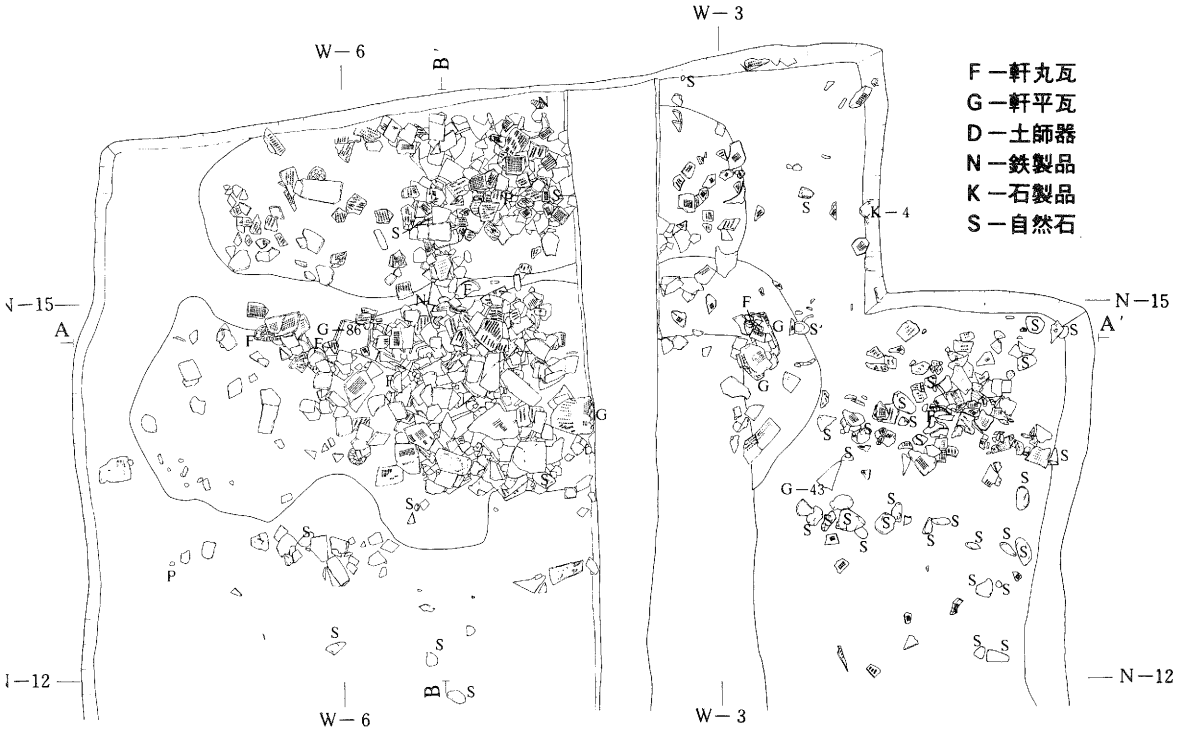
ＳＦ－１築地跡

調査区ほぼ中央で東西方向に伸びる築地本体を検出した。調査区南半は、民有地内の埋設管工事及び基礎ブロック、またコンクリート塀の基礎等で旧表土まで削平を受けている。築地本体はすでに削平されているが、基礎の南北西側には、１ｍ程の広がりで築地崩落土が堆積していた。築地の基礎の遺存状況が良好な所では、旧表土を南北に幅310 cm程、深さ35～40cm程、逆台形状に掘り込んでから黄褐色土と黒褐色土を交互に水平に積み上げて版築している。築地本体上面は、ほぼ中央部の遺存状況が良好な所で高さ40cm程を計る。

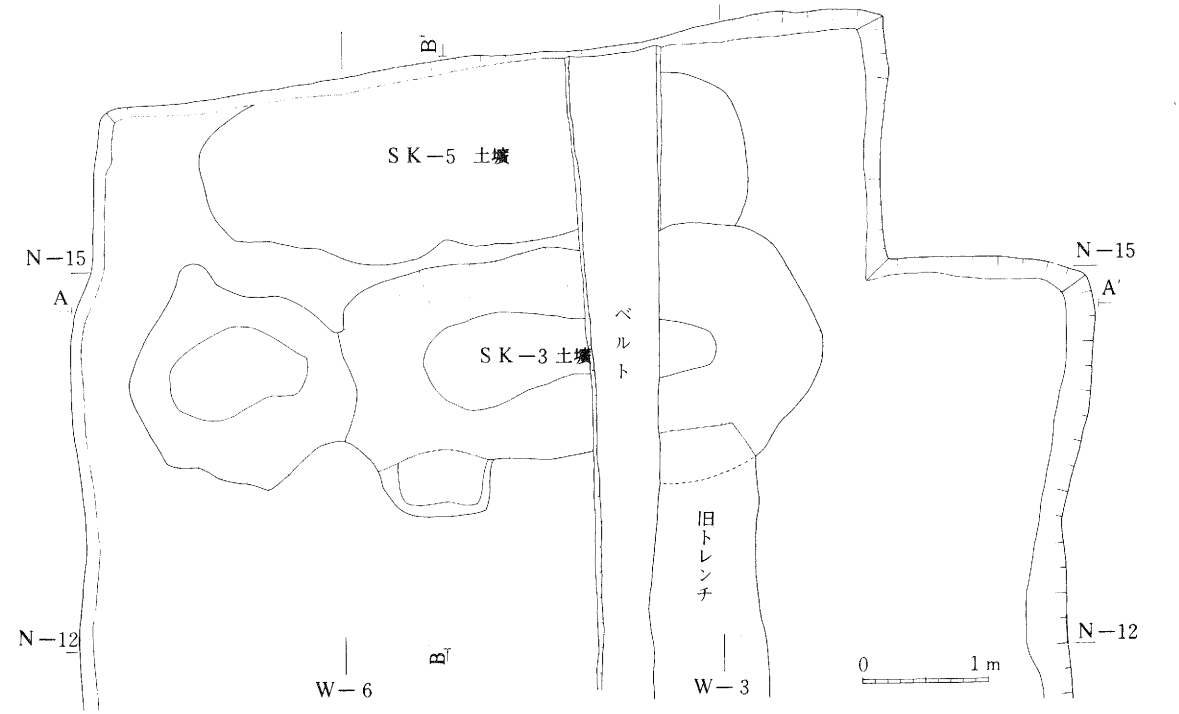
堆積状況は、基本的に黒褐色土、



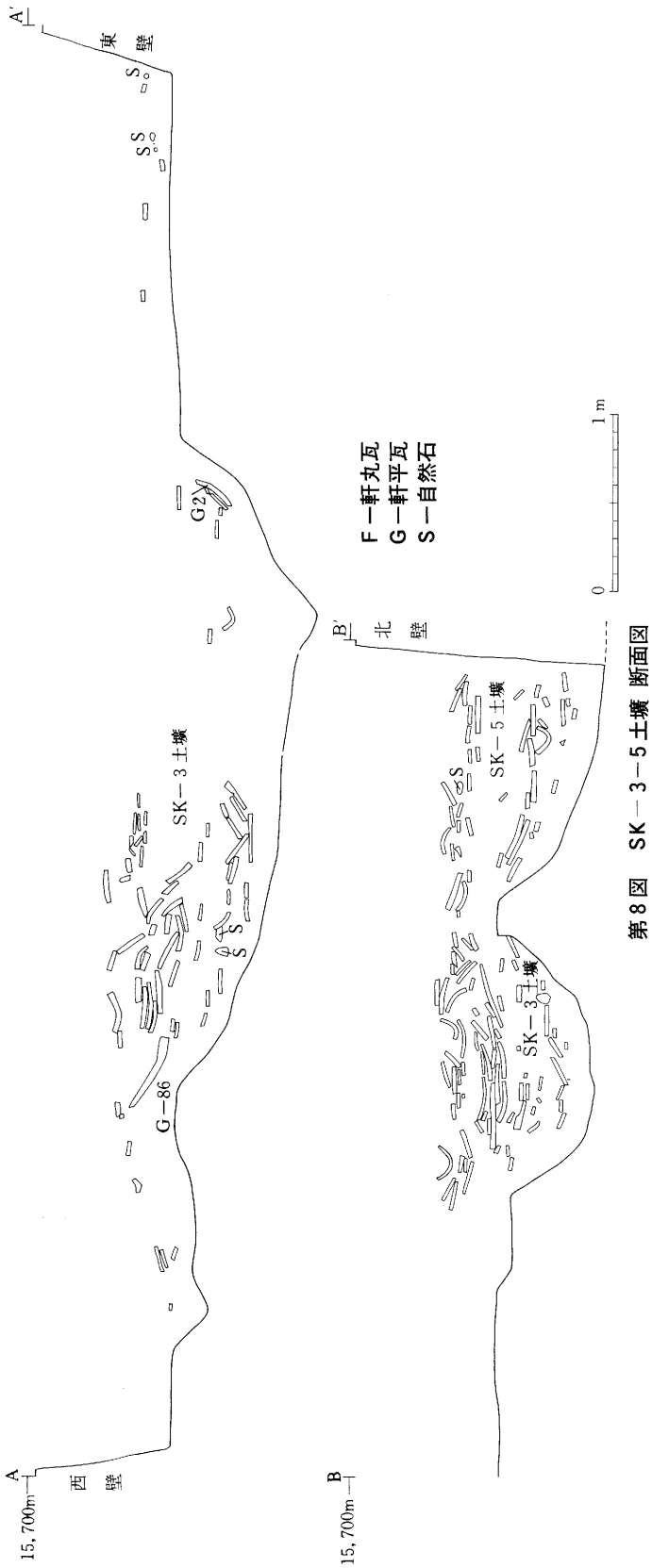
第６図　Ⅴ層築地崩落上面遺物出土状況平面図



ＳＫ－３・５土壙検出上面遺物出土状況平面図

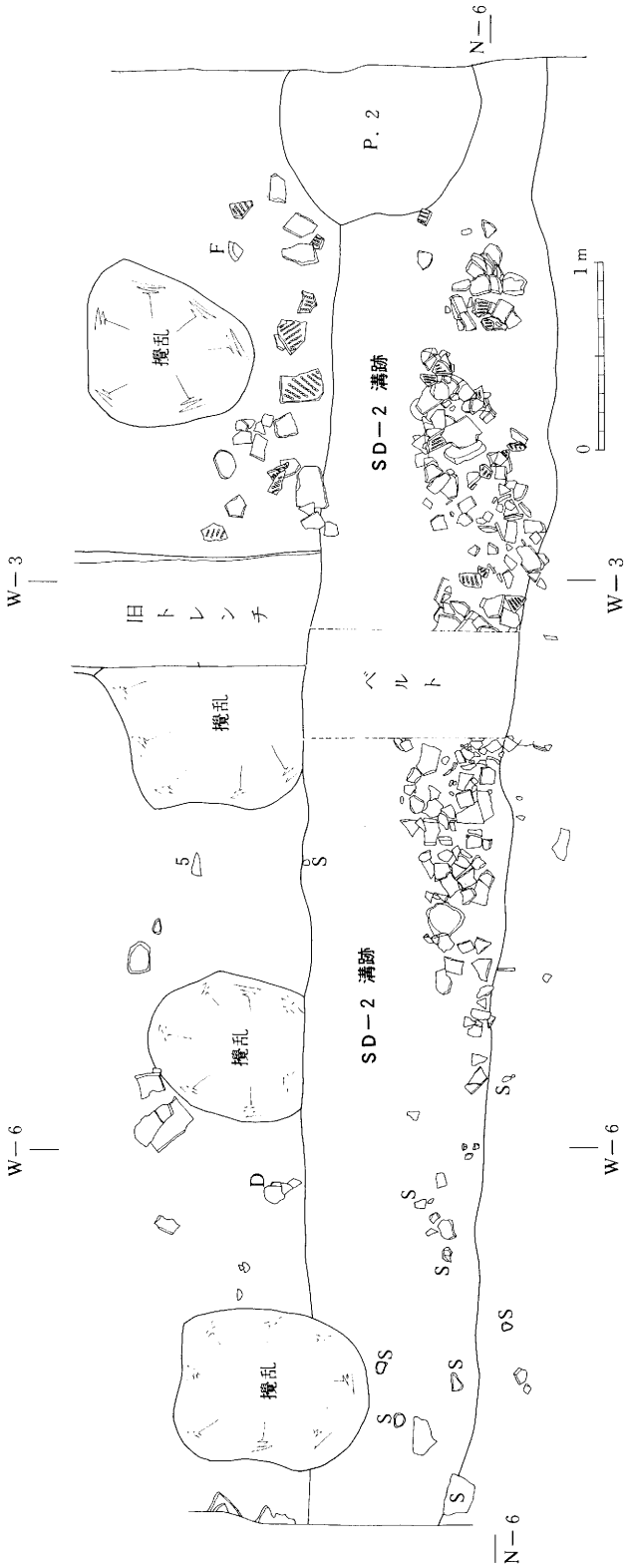


第７図　ＳＫ－３・５土壙平面図



第8図　SK－3－5土壙 断面図

黄褐色土を厚さ3～5cmで交互に積み上げて固くしめっている。また上層面では暗褐色土の色に1cm前後の小石を含む層を版築している。築地基礎上面からは築地両端から築地に伴う状況でピットが10数個検出されたが、柱穴掘り方、間尺等から推察すると寄柱として断定しがたい。築地本体の南側には幅 100cm前後の南側に緩るい傾斜をもつ「犬走り」が形成されている。築地北側は、木の根による攪乱、ＳＫ－３土壙、ＳＫ－４土壙等で削平が激しく遺存状況は悪い。築地の基礎事業を昭和55年の東門跡、昭和46年の南辺築地跡等の調査の掘り込み事業と比すれば、東門跡及び前回の南辺築地跡は、旧表土を浅い舟底形状に掘り込んでおり、今回の調査では、逆台形状を呈していることから、掘り込み事業の違いが認められる。さらに、築地基礎事業の土木工事の方法による差異とも考えられるが、さらに築地跡の調査の増加を待ちたい。



第９図　SD－２溝跡遺物出土状況平面図

溝　跡

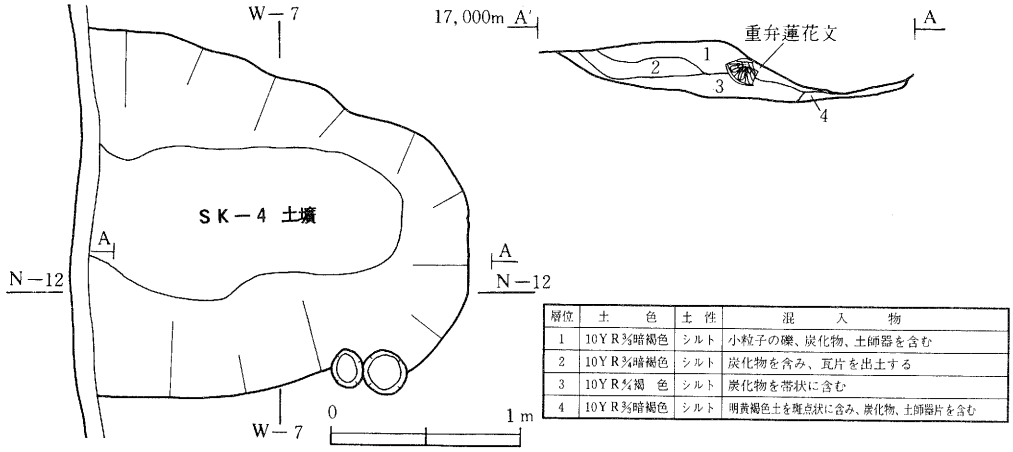
SD－1溝跡　調査区南半で検出された東西に伸びる上幅50～60cm、底幅30cm、深さ15～25cm程の断面Ｕ字形の溝跡である。溝跡の堆積土は褐色シルトで堆積土中から布目瓦と一緒に薬師堂に関係すると思われる近世瓦も出土している。

SD－2溝跡　調査区南半で検出され、築地跡の南側で平行して走る、東西に伸びる溝跡は、上幅１ｍ前後、底面幅60～70cm、深さ4～20cm程で断面逆台形を呈している。築地本体南端から、溝跡中心まで、150cm前後を計り、築地本体中心から溝跡中心まで430cm前後を呈している。堆積土上層からは密な瓦の出土状況を示し、下層から少量の古瓦片（第９図）を出土している。堆積土は、黒褐シルトで、一部分炭化物を含む。

堆積土上面には築地の崩落土と考えられる焼土及び炭化物を含む明黄褐色シルトの層が認められる。

土　壙

SK－1土壙　調査区北西部で検出され、西壁にかかる為全容は不明であるが、ほぼ円形で、直径3.5ｍ、深さ75cm、断面逆台形を呈している。堆積土は大別して２層に分けられ、



層位	土　色	土 性	混　入　物
1	10YR3/3暗褐色	シルト	小粒子の礫、炭化物、土師器を含む
2	10YR3/4暗褐色	シルト	炭化物を含み、瓦片を出土する
3	10YR4/4褐　色	シルト	炭化物を帯状に含む
4	10YR3/3暗褐色	シルト	明黄褐色土を斑点状に含み、炭化物、土師器片を含む

第10図　SK－4土壙平面図・断面図

褐色土、黒褐色土で、底面上から、直径20cm前後の河原石を多量に含み、古瓦、近世瓦等も多量に出土する。築地本体を掘り込んで削平している。

SK－2土壙　調査区南壁寄りで、不整楕円形状の落ち込みを検出したが、断面、平面プランを検討した結果、遺構と断定しえず、SK－2を欠番にした。

SK－3土壙　調査区北寄りで検出され、V層築地崩落土を掘り込んでいる。築地本体から1.5m北側で検出されている。平面形は不整長方形で長軸5.5m、短軸1.6m、深さは東側が深く、90cm、西側が20cmを計る。断面逆台形を呈している。堆積土は大別して4層に分けられる。瓦の出土状況を見ると堆積土上層面から山形文軒平瓦、宝相華文軒丸瓦、偏行唐草文軒平瓦、重弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、細弁蓮華文軒丸瓦等の文様瓦を含む瓦片を多量に出土している。

SK－4土壙　調査区南壁寄りで検出された。SK－4土壙は、上部がSK－1土壙、ピットNo.7で切り込まれている為、遺構の確認面はV層築地崩落土層であるが、断面観察の結果、確実にⅢ層かⅣ層面の掘り込みと思われる。平面形は西壁にかかる為全体は不明であるが、不整楕円形を呈し、深さ20～25cm前後である。堆積土は大別して2層に分けられ、シルト褐色土、及び黒褐色土である。

SK－5土壙　調査区北壁寄りで検出されており、遺構確認面はV層である。北壁にかかる為全容は不明であるが、平面形は不整楕円形状で調査区外に拡がると思われる。確認される幅は4.3m程で、深さは85cm程であるが、調査区外に伸びてさらに深くなると思われる。V層築地崩落土層を掘り込んでおり遺構検出面及び、堆積上層面から古瓦を基底面までぎっしり積み重なって出土している。特徴ある瓦としては、重弁蓮華文軒丸瓦（第17・18図）、宝相華文軒丸瓦（第19図）、偏行唐草文軒平瓦（第13・20図）、さらに土師器坏、鉄滓等を出土している。

3．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石製品、金属製品古銭、土製品等である。その中で、瓦類が全遺物出土量の大半を占めており、遺物の総量は、整理用平箱で250箱にも及ぶ。特に瓦は、築地跡上面及び築地崩落土中より多量に出土している。

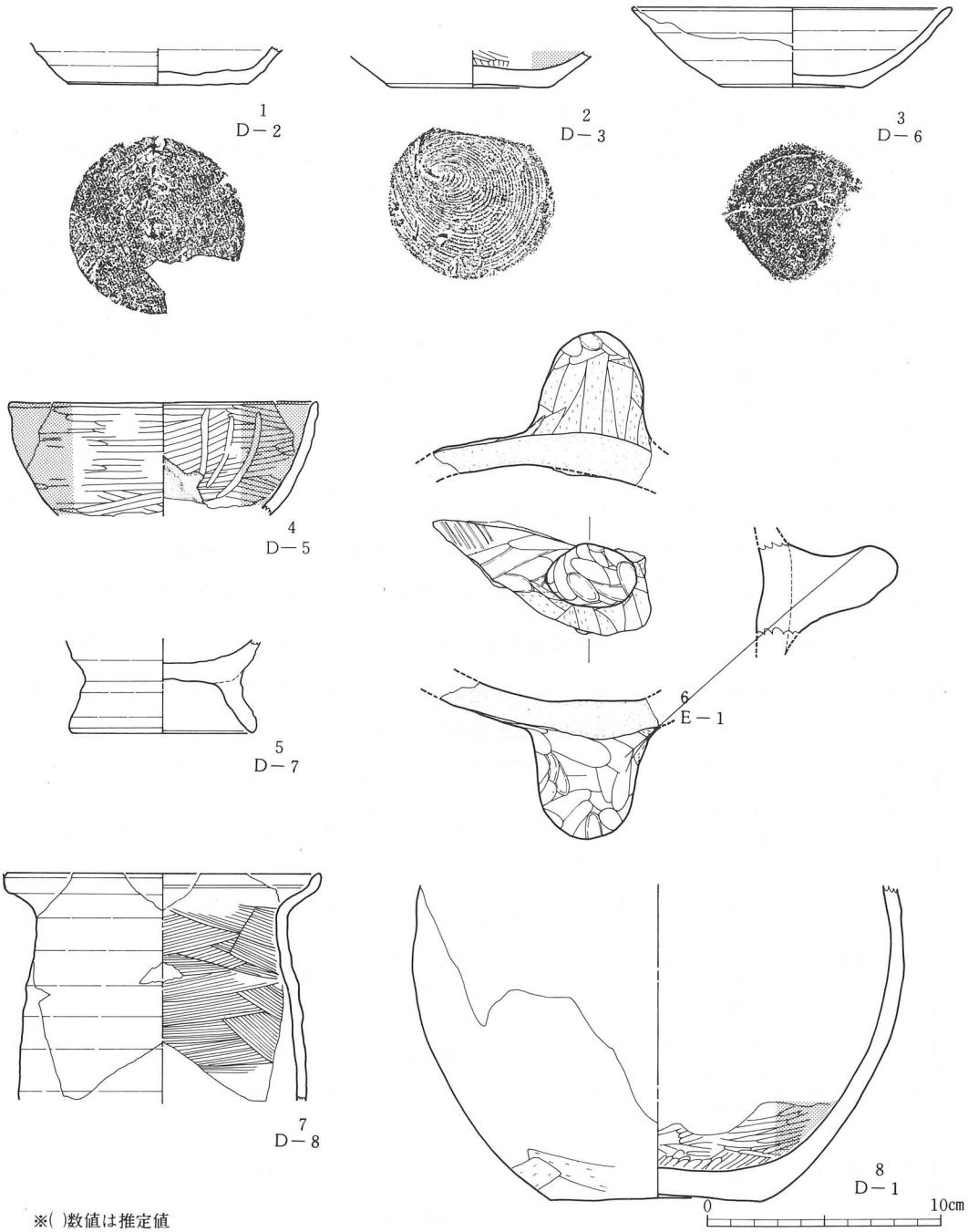
各種別ごとに記述する。

(1) 土師器（第11図　図版31－９）

土師器はⅢ層、ＳＤ－１・２溝跡、ＳＫ－３・５土壙等から出土している。出土量は少なく、図化しえたのが坏・甕等５点である。坏（第11図２）は、SK－5埋土から出土し、ロクロ調整され、内面は、ヘラミガキ、黒色処理が施されている。坏（第11図４）は、C区SD－1溝跡から出土し、ロクロ未使用で、内外面とも黒色処理され、また内面ヘラミガキが施されている。坏（第11図３）は、ピット－３埋土から出土し、内外面ともロクロ調整が施され、底部切り離しは、回転糸切りである。坏（第11図１）は、ＳＫ－３土壙から出土し内外面ともロクロ調整が施され、底部切り離しは、回転ヘラ切りのち手持ちヘラケズリである。底部内面には、漆が付着している。甕（第11図７）は、Ａ区拡張Ⅲ層から出土し、頸部でくびれ、口縁部で外反し、内外面ともロクロ調整され、内面は、ヘラナデが施されている。甕（第11図８）はSK－3土壙

第２表　出土文様瓦分類表

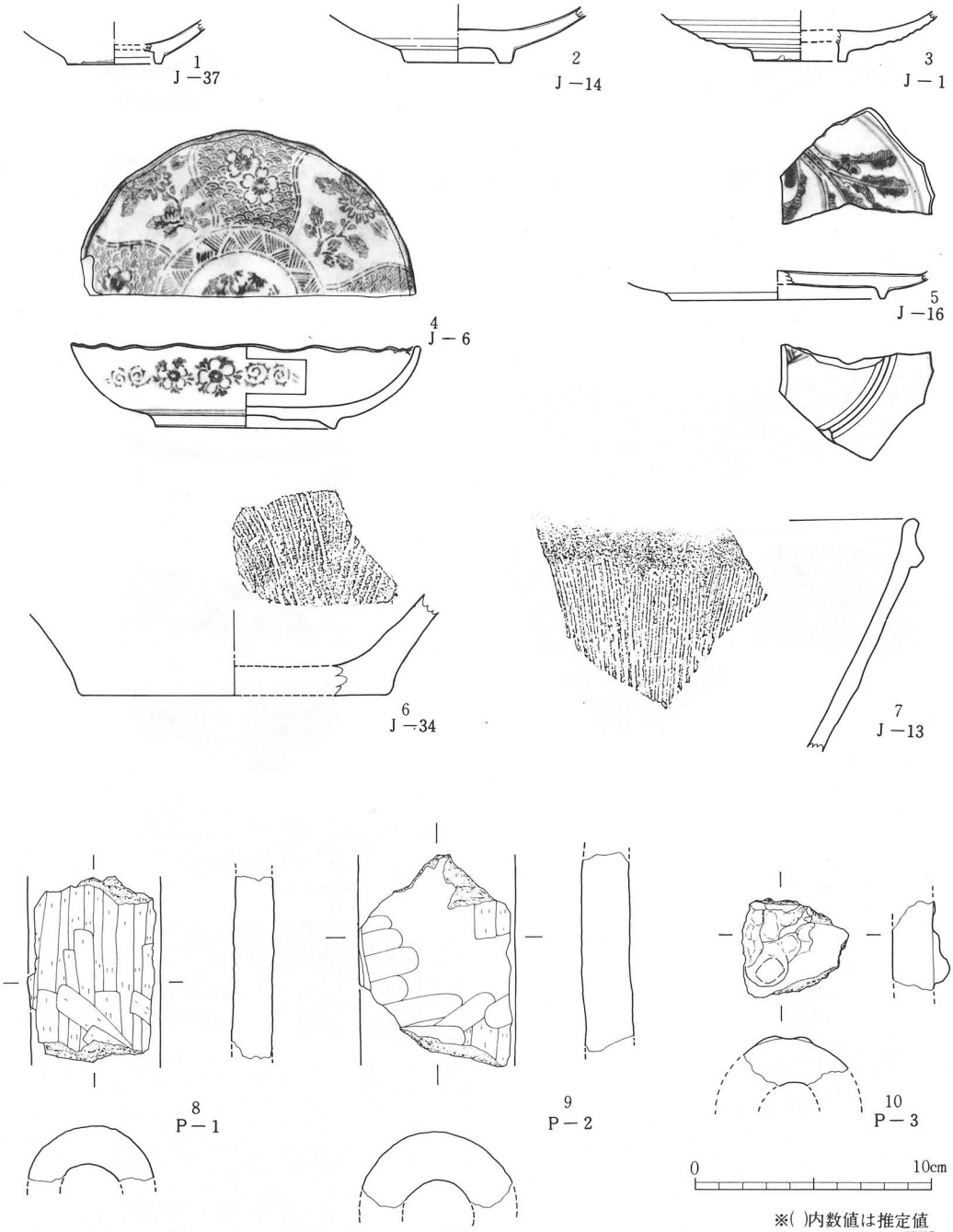
軒丸瓦				軒平瓦			
種類	分類	点数	合計	種類	分類	点数	合計
重弁蓮華文	第Ⅰ類	2	61	重弧文	第Ⅰ類	5	7
	Ⅱ	1			Ⅱ	0	
	Ⅲ	0			Ⅲ	0	
	Ⅳ	9			不明	2	
	Ⅴ	2		偏行唐草文	第Ⅰ類	35	40
	Ⅵ	1			Ⅱ	0	
	その他				Ⅲ	3	
	不明	46			Ⅳ	1	
宝相華文	第Ⅰ類	2	5		Ⅴ	0	
	Ⅱ	0			不明	1	
	Ⅲ	1		均整唐草文	第Ⅰ類	2	10
	Ⅳ	2			Ⅱ	5	
	Ⅴ	0			Ⅲ	0	
細弁蓮華文	第Ⅰ類	1	2		Ⅳ	0	
	Ⅱ	1			不明	3	
歯車文		1	1	連球文	第Ⅰ類	1	8
					Ⅱ	5	
					不明	2	
桜花様文		1	1	山形文		17	17
総計		７０点		総計		８２点	



※( )数値は推定値

番号	登録番号	種別	器形	地区遺構	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	D－2	土師器	坏	B区 SK－3	堆積土	ロクロ調整	ロクロ調整	手持ヘラケズリ	ロクロ調整	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	7.8	口縁部から底部	—
2	D－3	土師器	坏	A区 SK－5	堆積土	—	ロクロ調整	回転糸切りのち一部手持ヘラケズリ	—	不明	ヘラミガキ	—	—	6.2	体部下端から底部	—
3	D－6	土師器	坏	C区 P－3	堆積土	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切りのち手持ヘラケズリ	ロクロ調整	ロクロ調整	ロクロ調整	6.0	13.6	3.4	口縁部から底部 1/2	31-9
4	D－5	土師器	坏	C区 SD－1	堆積土	ヨコナデ	黒色処理ヘラミガキ	—	ナデ	黒色処理ヘラミガキ	—	—	(13.2)	—	口縁部から体部 1/3	—
5	D－7	土師器	高台付坏	旧トレンチ	堆積土	—	ロクロ調整	—	—	不明	不明	—	—	(6.8)	体部下端より高台部 1/3	—
6	E－1	須恵器	把手付	D区 SD－2	堆積土	—	ケズリナデ		—	ナデ	—	—	—	—		—
7	D－8	土師器	甕	A拡張区	Ⅲ層	ロクロ調整	ロクロ調整	—	ロクロ調整のちナデ	ロクロ調整	—	—	(13.4)	—	口縁部から体部上部 1/4	—
8	D－1	土師器	甕	A拡張区SK-3	堆積土	—	横位ケズリ	不明	—	不明	黒色処理ヘラミガキ	—	—	9.0	体部から底部	—

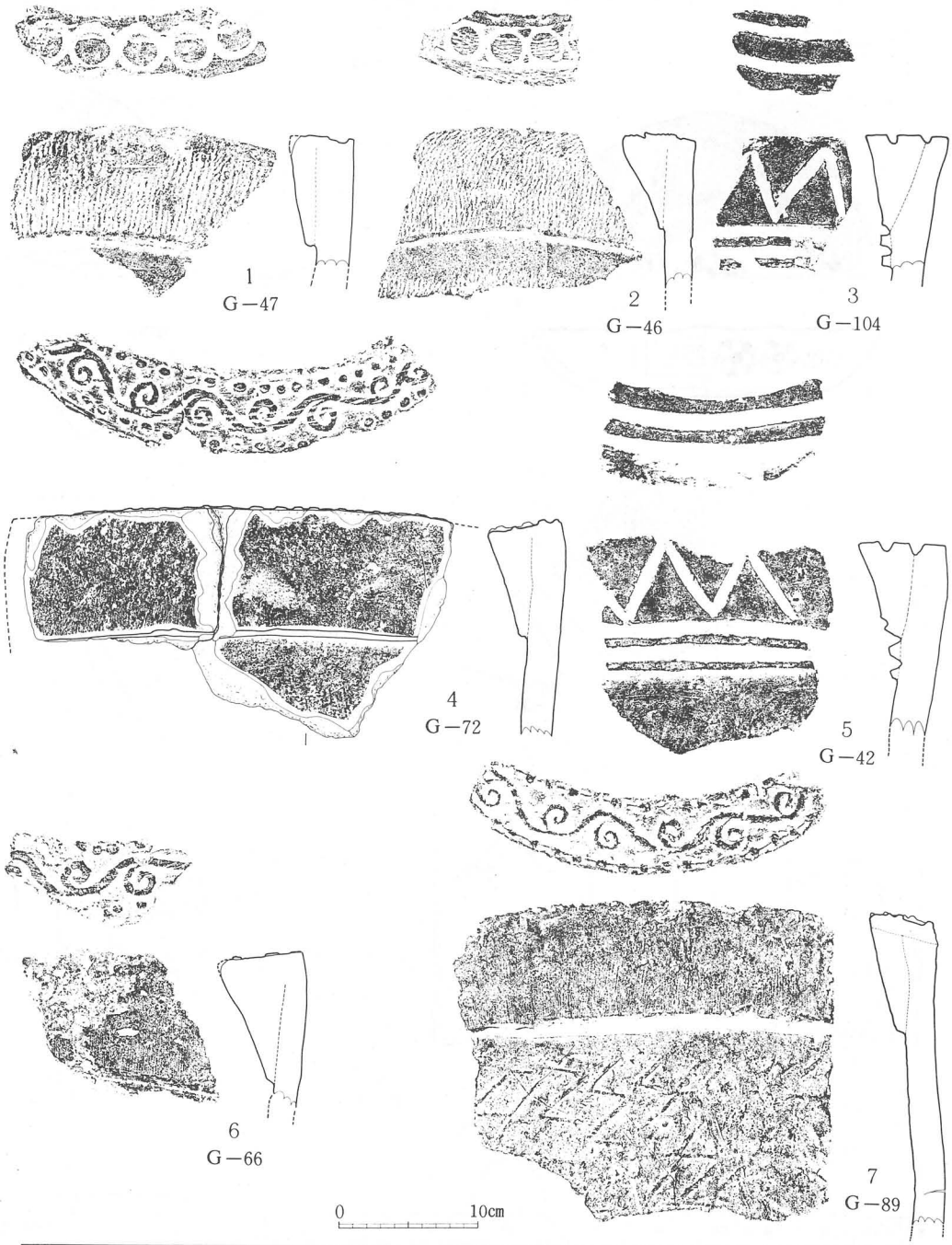
第11図　出土遺物　土師器・須恵器



※( )内数値は推定値

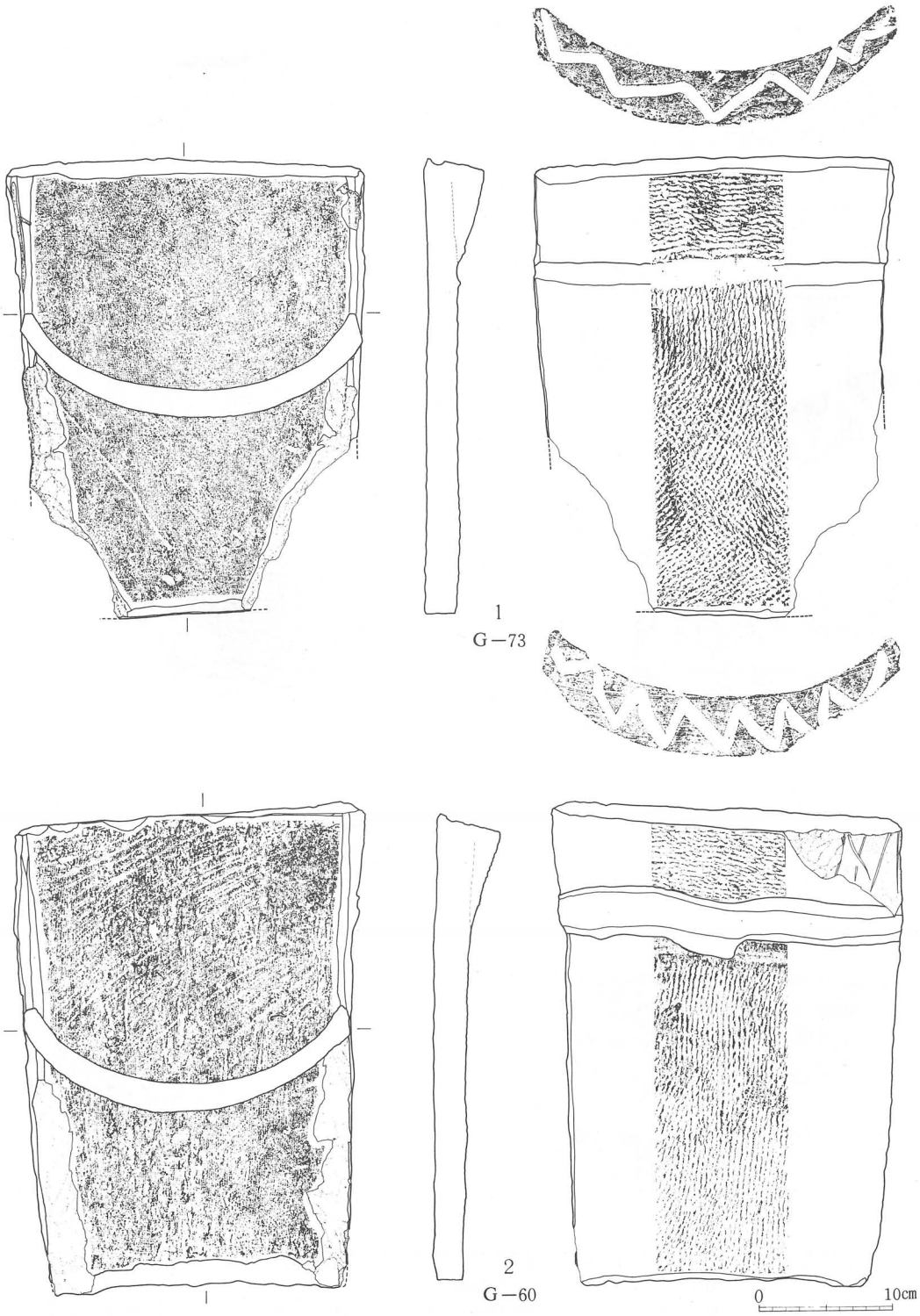
番号	登録番号	地区	層位	器形	外面	内面	法量 底径(cm)	法量 口径	法量 器高(cm)	備考	写真番号
1	J－37	C地区	Ⅱ層	碗	ケズリ出し高台施釉貫入あり	施釉　貫入あり	4.0			見込み部分は施釉されていない	——
2	J－14	A拡張区	Ⅲ層	碗	ケズリ出し高台施釉	施釉	4.3			見込み部分は施釉されていない	32－2
3	J－1		表土	碗	施釉（鉄釉）	施釉　貫入あり	3.9				32－3
4	J－6	旧トレンチ		皿	染付桜・唐草同心円2本施釉	染付菊・桜・青海波文 施釉	7.6	14.4	3.5		32－4
5	J－16	旧トレンチ		皿	染付　施釉	染付草文　同心円2本施釉	9.0				32－1
6	J－34	C区SK-2	堆積土	擂鉢	ナデ施釉(鉄釉)底部糸切り痕	櫛目7本単位施釉(鉄釉)使用痕	13.0				——
7	J－13		Ⅲ層	擂鉢	施釉（鉄釉）	櫛目12本単位 施釉(鉄釉)				片口	31－10
8	P－1	D地区	Ⅲ層	羽口	縦位ケズリ	斜位擦痕	外径(5.4)	孔径(2.6)		外面鉄滓付着	32－7
9	P－2	D地区	Ⅲ層	〃	縦位ケズリ → 横位ナデ	斜位擦痕	外径6.4)	外径(2.4)			——
10	P－3	SD－2	堆積土	〃	不明	不明	孔径6.3)	——		内外面共磨滅 外面鉄滓付着	——

第12図　出土遺物　土師器・陶磁器



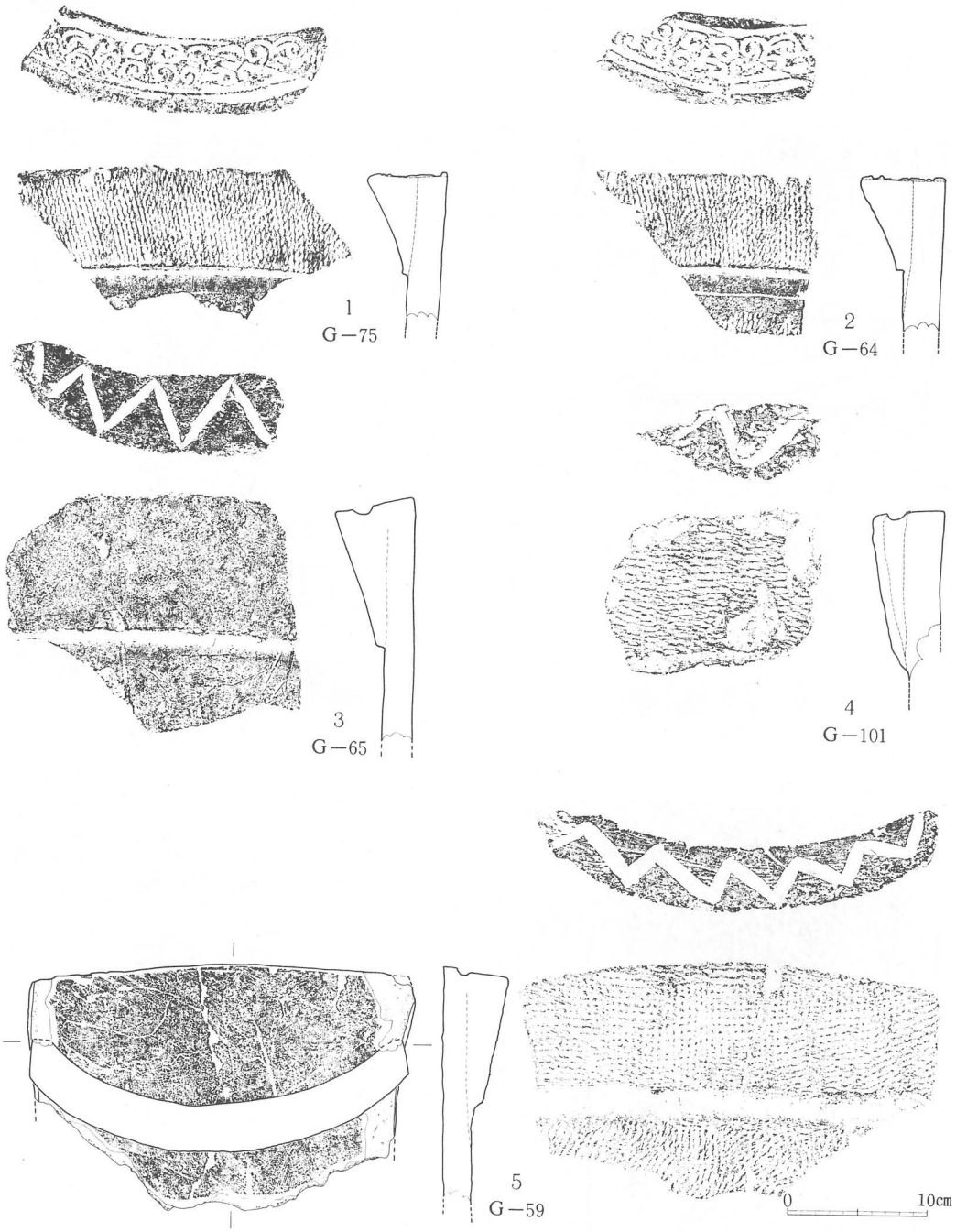
番号	登録番号	器　形	地区遺構	層位	凸　面	凹　面	分類	写真図版
1	G－47	連　珠　文	C区　SK－2	堆土	縄叩き目	布　目	Ⅰ類	26－3
2	G－46	連　珠　文	C区　SD－2	堆土	縄叩き目	布　目	Ⅱ類	25－6
3	G－104	重　弧　文	A区　SK－3	堆土	鋸歯文、平行沈線　鋸	布　目	Ⅰ類	24－6
4	G－72	偏行唐草文	C－Dベルト SD-2	堆土	縄叩き目　顎部に朱	布目、顎部指ナデ	Ⅲ類	—
5	G－42	重　弧　文	B区	Ⅳ層	鋸歯文、平行沈線	布目、スリケシ	Ⅰ類	24－5
6	G－66	偏行唐草文	B区	Ⅲ層	縄叩き目、スリケシ「朱付着」	布目、ナデ	Ⅲ類	24－1
7	G－89	偏行唐草文	A区　SK－3	堆土	格子叩き目	布　目	Ⅰ類	—

第13図　出土遺物　軒平瓦（1）



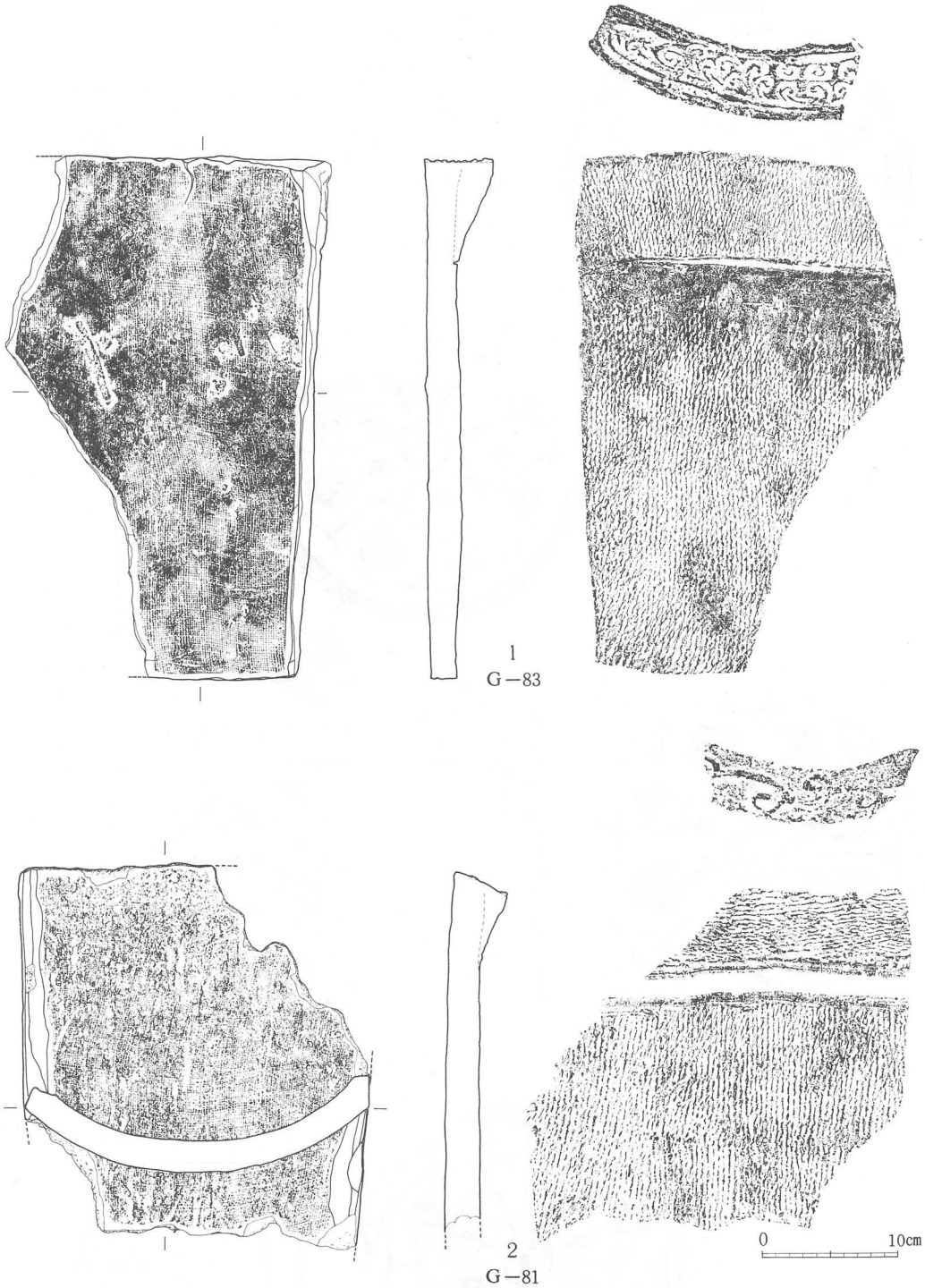
番号	登録番号	器　形	地　区　遺	層位	凸　　面	凹　　面	分類	写真図版
1	G－73	山形文	B区　SK－3	堆土	縄叩き目	糸切り痕　布目	—	26－1
2	G－60	山形文	A区　SK－3	堆土	縄叩き目	糸切り痕　布目	—	26－4

第14図　出土遺物　軒平瓦（2）



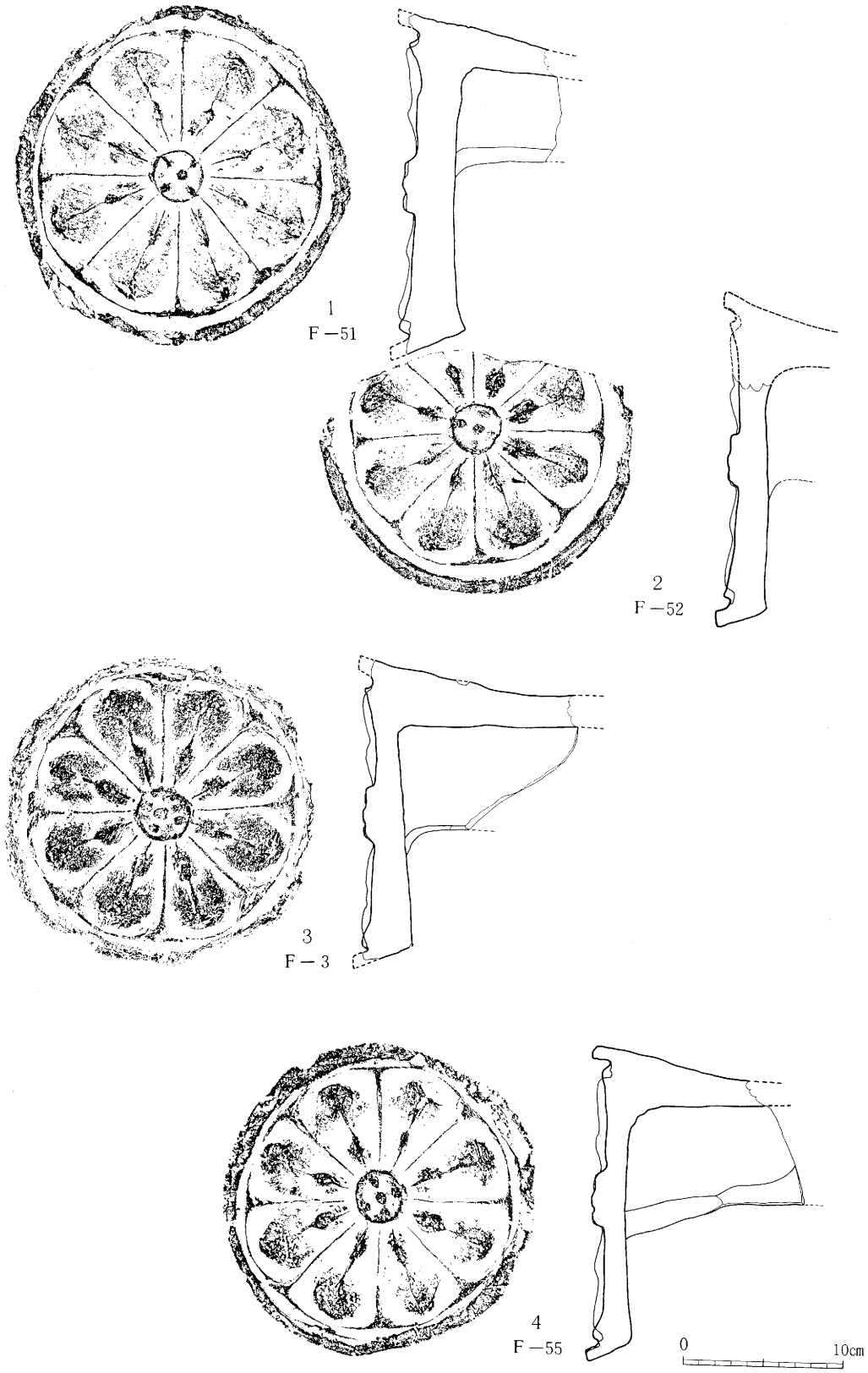
番号	登録番号	器　形	地区遺構	層位	凸　　面	凹　　面	分類	写真図版
1	G－75	均整唐草文	A区　SK-3	堆土	縦縄叩き目	布目痕　スリケシ	Ⅱ類	25－5
2	G－64	均整唐草文	A 拡張区	Ⅳ層	縦縄叩き目スリケシ	布　目　痕	Ⅱ類	26－2
3	G－65	山　形　文	A 拡張区	Ⅳ層	スリケシ（朱付着）	布目痕スリケシ	—	25－2
4	G－101	山　形　文	C区　P－2	堆土	横縄叩き目	布目痕スリケシ	—	25－1
5	G－59	山　形　文	A区　SK-3	堆土	縄叩き目	糸切り痕、布目スリケシ	—	25－3

第15図　出土遺物　軒平瓦（3）

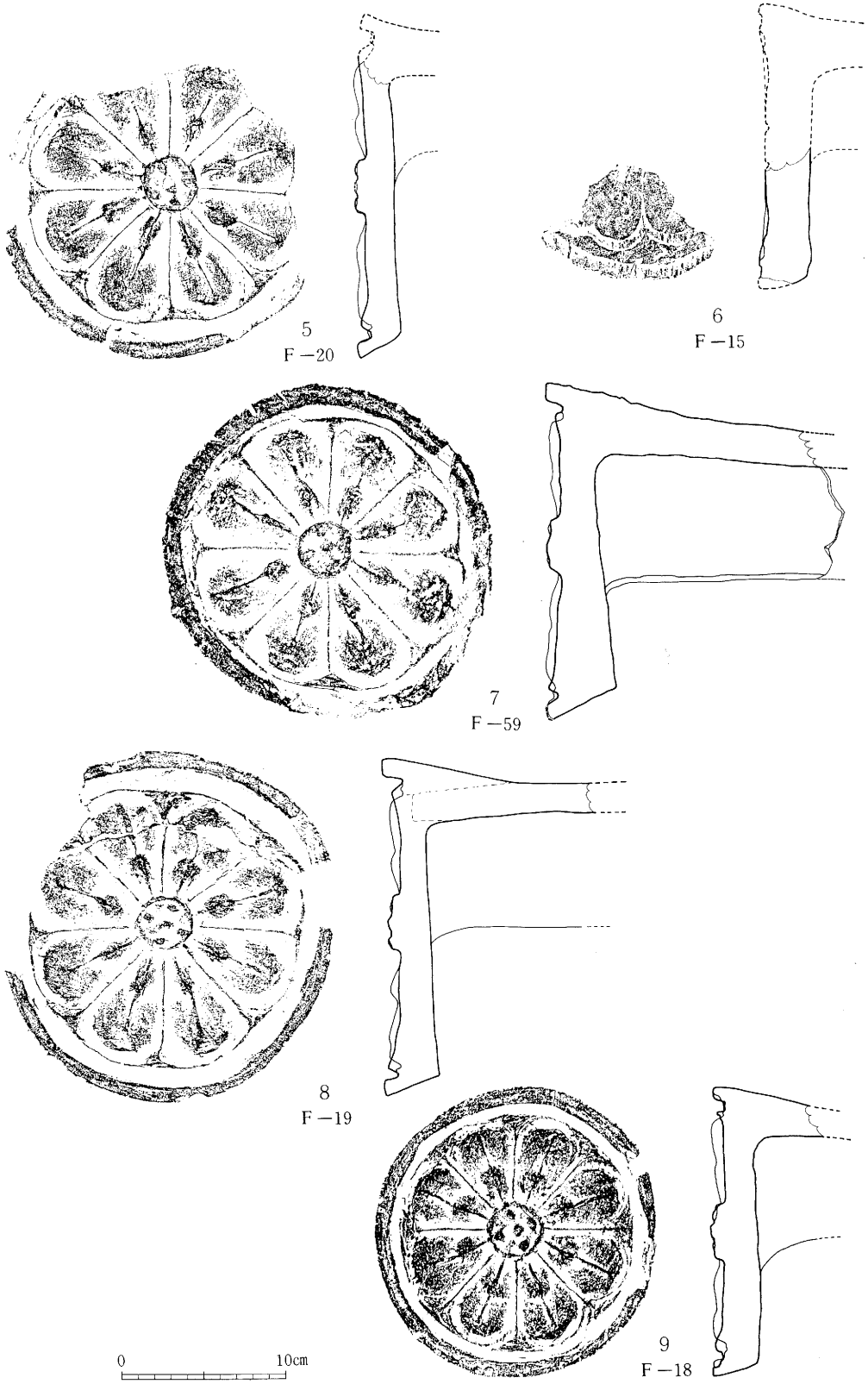


番号	登録番号	器　形	出土遺構	層位	凸　面	凹　面	分類	写真図版
1	G－83	均整唐草文	A区　SK－5	堆土	縦縄叩き目	布目痕、スリケシ	Ⅱ類	26－5
2	G－81	偏行唐草文	SK－5	堆土	縄叩き目	布目痕スリケシ	Ⅳ類	24－4

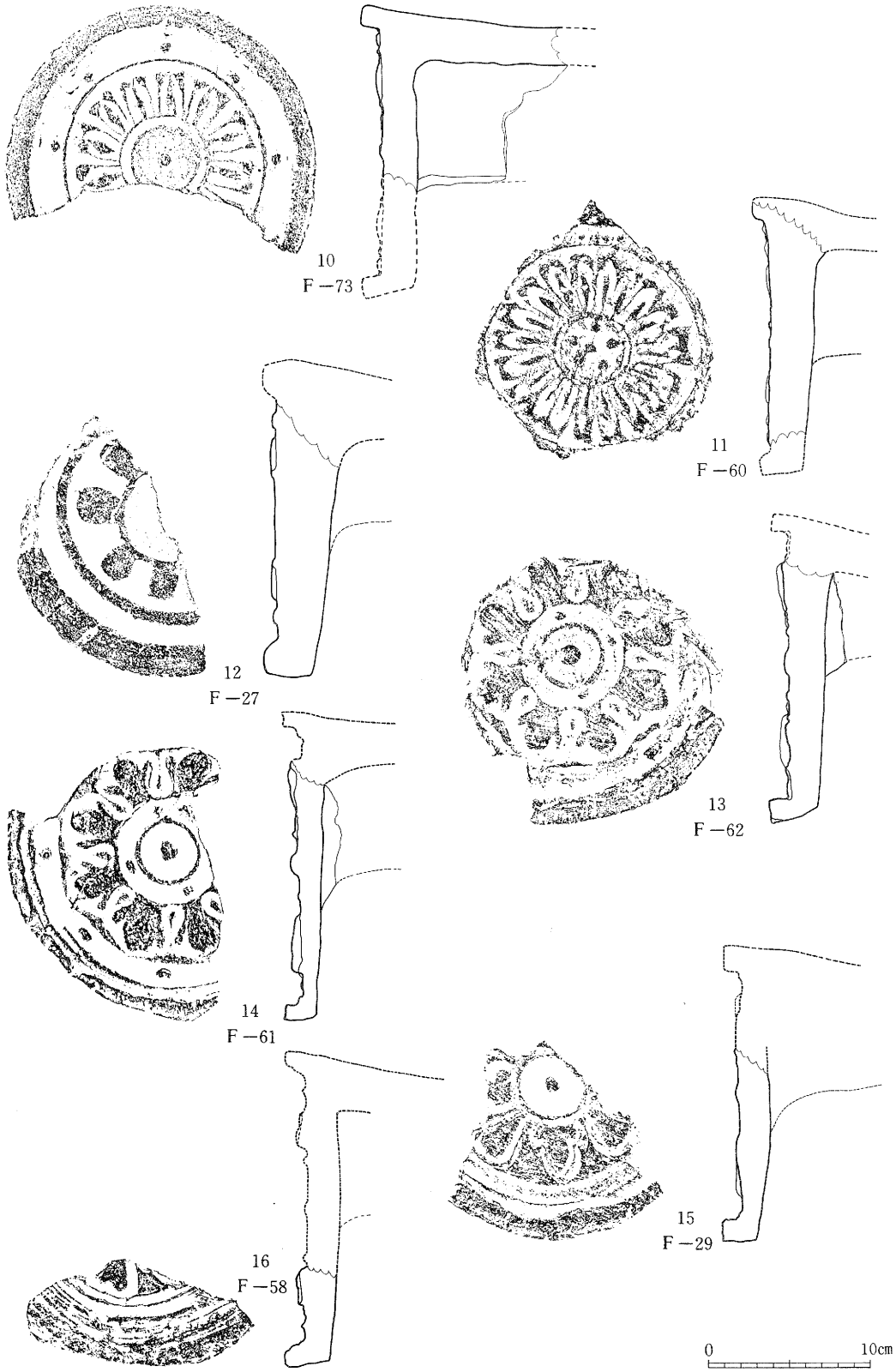
第16図　出土遺物　軒平瓦（4）



第17図　出土遺物　軒丸瓦（1）

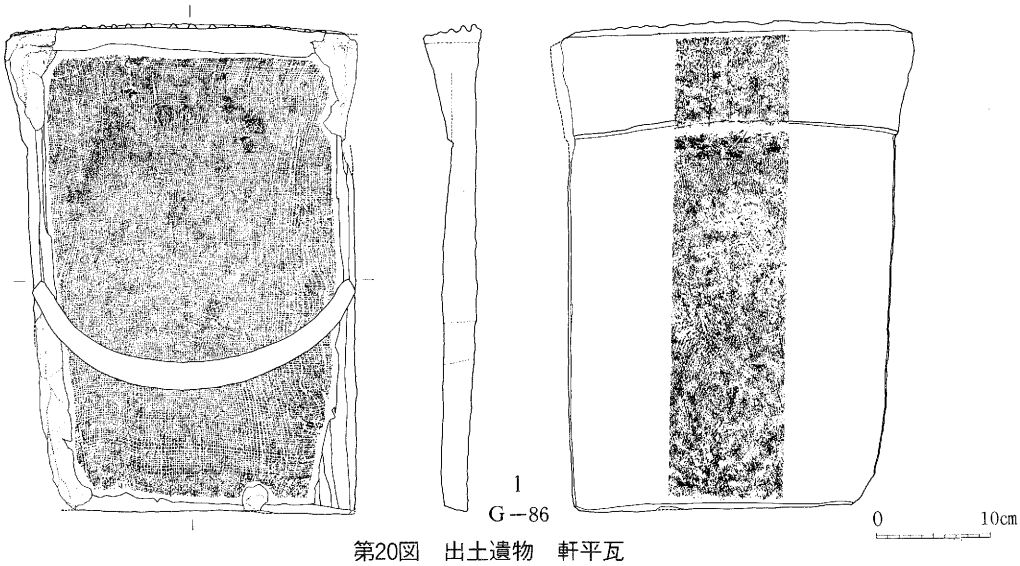


第18図　出土遺物　軒丸瓦(2)



第19図　出土遺物　軒丸瓦（3）

番号	登録番号	器　形	地区遺構	層位	凸　面	凹　面	分類	写真図版
1	G－86	偏行唐草文	A区　SK－3	堆土	細叩き目	布　目	Ⅰ	24－7



第20図　出土遺物　軒平瓦

第３表　出土遺物　軒丸瓦観察表

番号	登録番号	種　類	地区遺構名	層　位	調 凸　面	整 凹　面	分類	写真図版
1	F－51	重弁蓮華文	A区SK－5		ケズリ　指ナデ	ナ　デ	Ⅰ類	27-1
2	F－52	〃	A区SK－3			ケズリ後ヘラナデ	Ⅱ類	27-3
3	F－3	〃	C区	Ⅱ層		接合部ケズリの後ナデ	Ⅳ類	28-3
4	F－55	〃	A区SK－3		ナ　デ	瓦当裏面ケズリのちナデ	Ⅳ類	27-5
5	F－20	〃	B区	Ⅳ層		瓦当裏面ケズリの後ナデ	Ⅳ類	28-2
6	F－15	桜花様文	A区	Ⅳ層				29-9
7	F－59	重弁蓮華文	A区SK－3		接合部ヘラキズ	瓦当裏面　指ナデ	Ⅳ類	27-4
8	F－19	〃	D区	Ⅲ層		指ナデ	Ⅳ類	27-6
9	F－18	〃	D区	Ⅲ層		指ナデ	Ⅵ類	28-5
10	F－73	細弁蓮華文	A区SK－3		ケズリのちナデ	布目　ナデ	Ⅰ類	29-6
11	F－60	〃	A区SK－3			瓦当裏面　ケズリのちナデ	Ⅱ類	29-8
12	F－27	歯車文	B区拡張	Ⅳ層		瓦当裏面　ケズリのちナデ		29-5
13	F－62	宝相華文	A区SK－5			瓦当裏面　ケズリのちナデ	Ⅰ類	29-2
14	F－61	〃	A区拡張	Ⅳ層		瓦当裏面　ケズリのちナデ	Ⅰ類	29-1
15	F－29	〃	A区拡張	Ⅲ層		瓦当面ケズリのちナデ	Ⅳ類	29-4
16	F－58	〃	A区SK－25			ケズリのちナデ	Ⅲ類	29-3

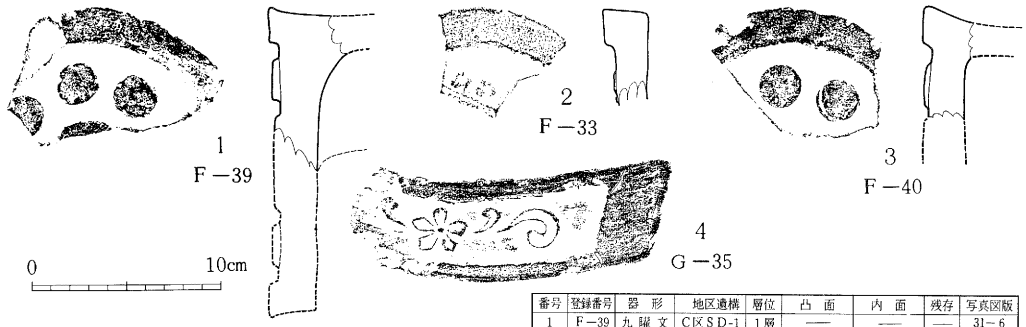
から出土し、体部下半の破片で、底部平底、体部球形で、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。

(2)　須恵器（第11図６）

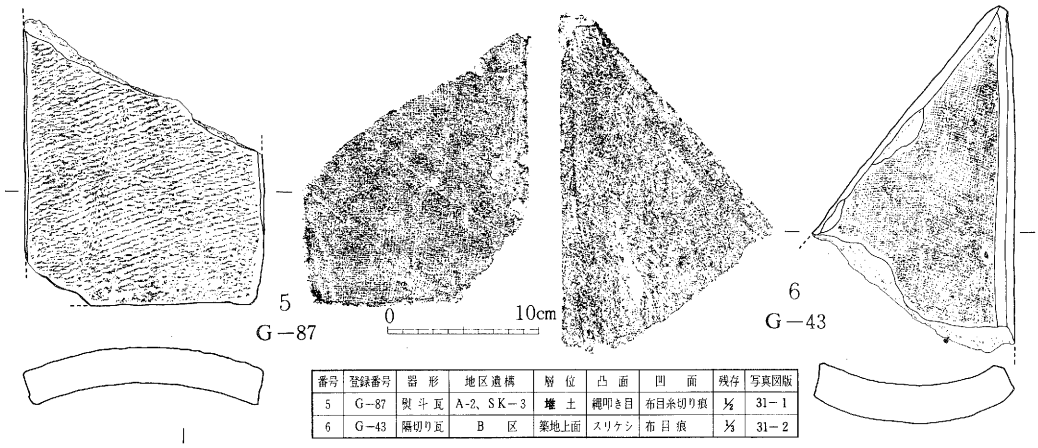
ほとんどが小破片で図化しえたのは、１点である。SD－2溝跡堆積土から出土し、外面に長さ4.5cm、幅4.5cmの把手が付く破片で、器形は、把手付の甕あるいは甑に考えられる。

(3)　瓦

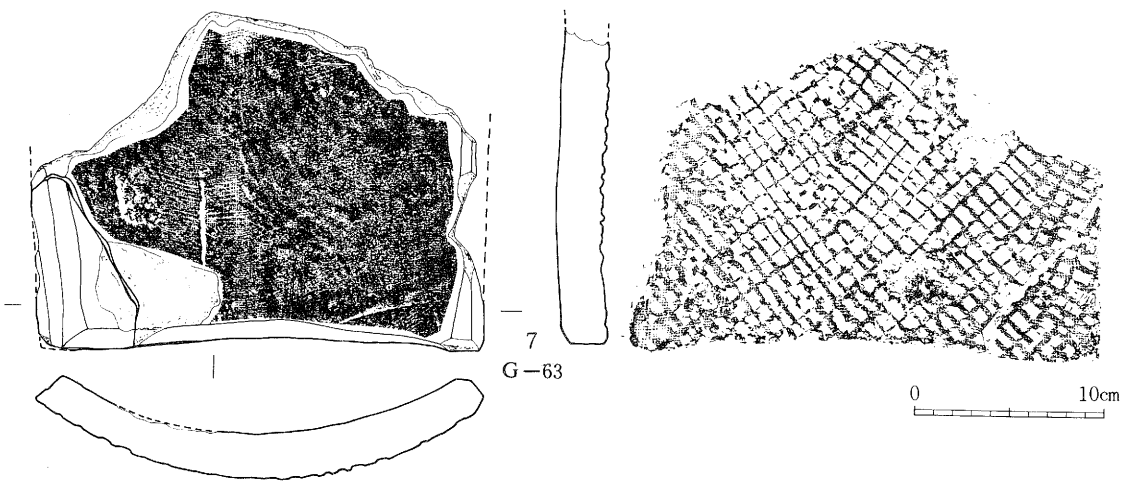
瓦は第Ⅰ～Ⅳ層、築地跡上面、及び崩落土中から多量に出土している。種類は、軒平瓦、軒



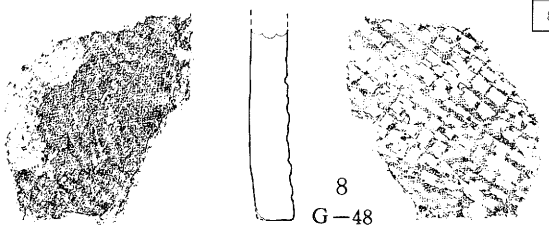
番号	登録番号	器形	地区遺構	層位	凸面	内面	残存	写真図版
1	F－39	九瑞文	C区SD-1	I層	―	―	―	31－6
2	F－33	軒丸瓦	D区	I層	―	―	―	―
3	F－40	九瑞文	C区SD-1	I層	―	―	―	31－7
4	G－35	唐草文	B区	III層	―	―	―	31－8



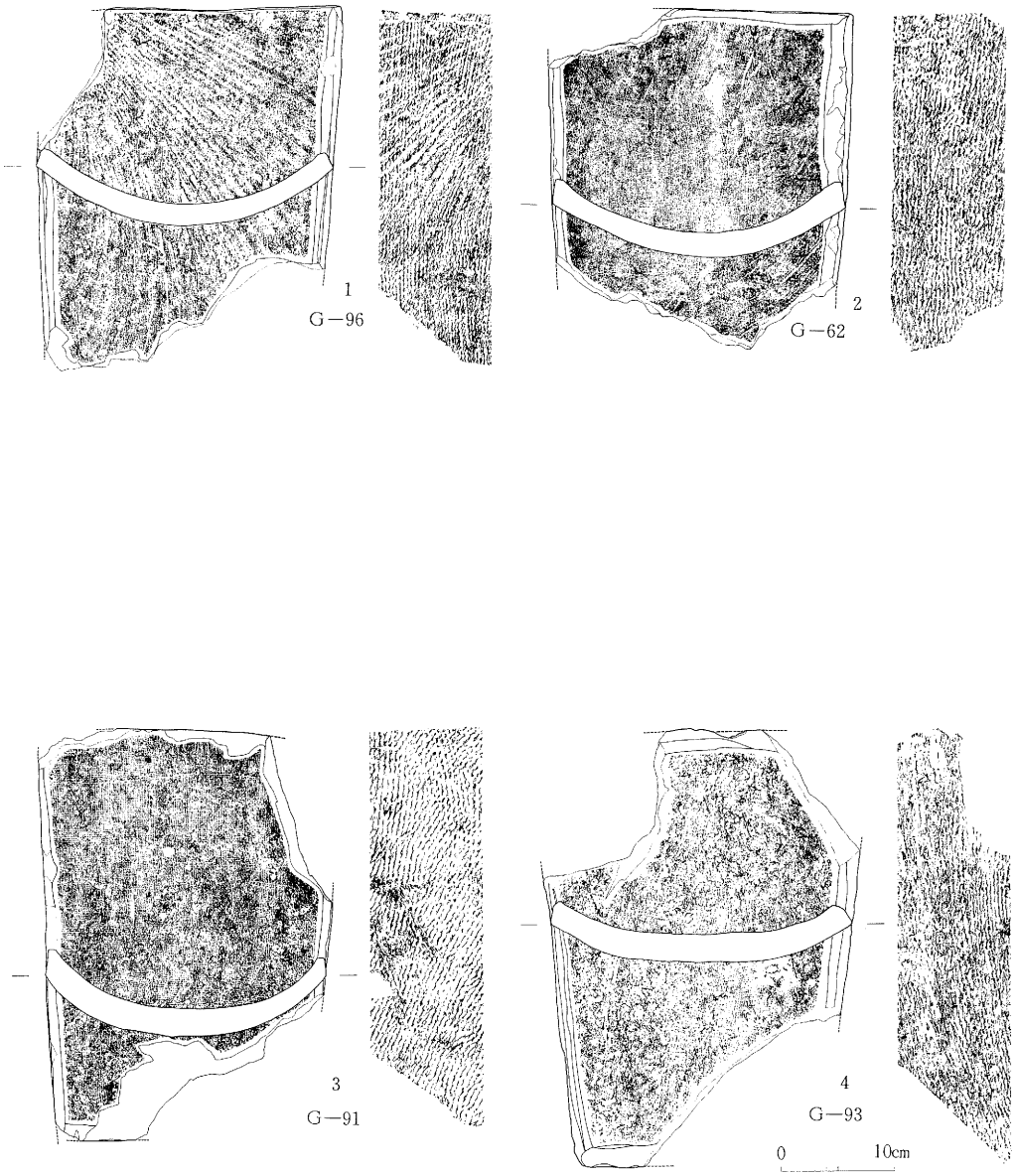
番号	登録番号	器形	地区遺構	層位	凸面	凹面	残存	写真図版
5	G－87	熨斗瓦	A-2、SK－3	堆土	縄叩き目	布目糸切り痕	½	31－1
6	G－43	隔切り瓦	B区	築地上面	スリケシ	布目痕	⅓	31－2



番号	登録番号	器形	地区遺構	層位	凸面	凹面	分類	写真図版
7	G－63	平瓦	A区張区	IV層	格子叩き目 布目痕	布目痕スリケシ	―	31－3
8	G－48	平瓦	A区 SK-1	堆土	格子叩き目 布目痕	布目	―	31－4



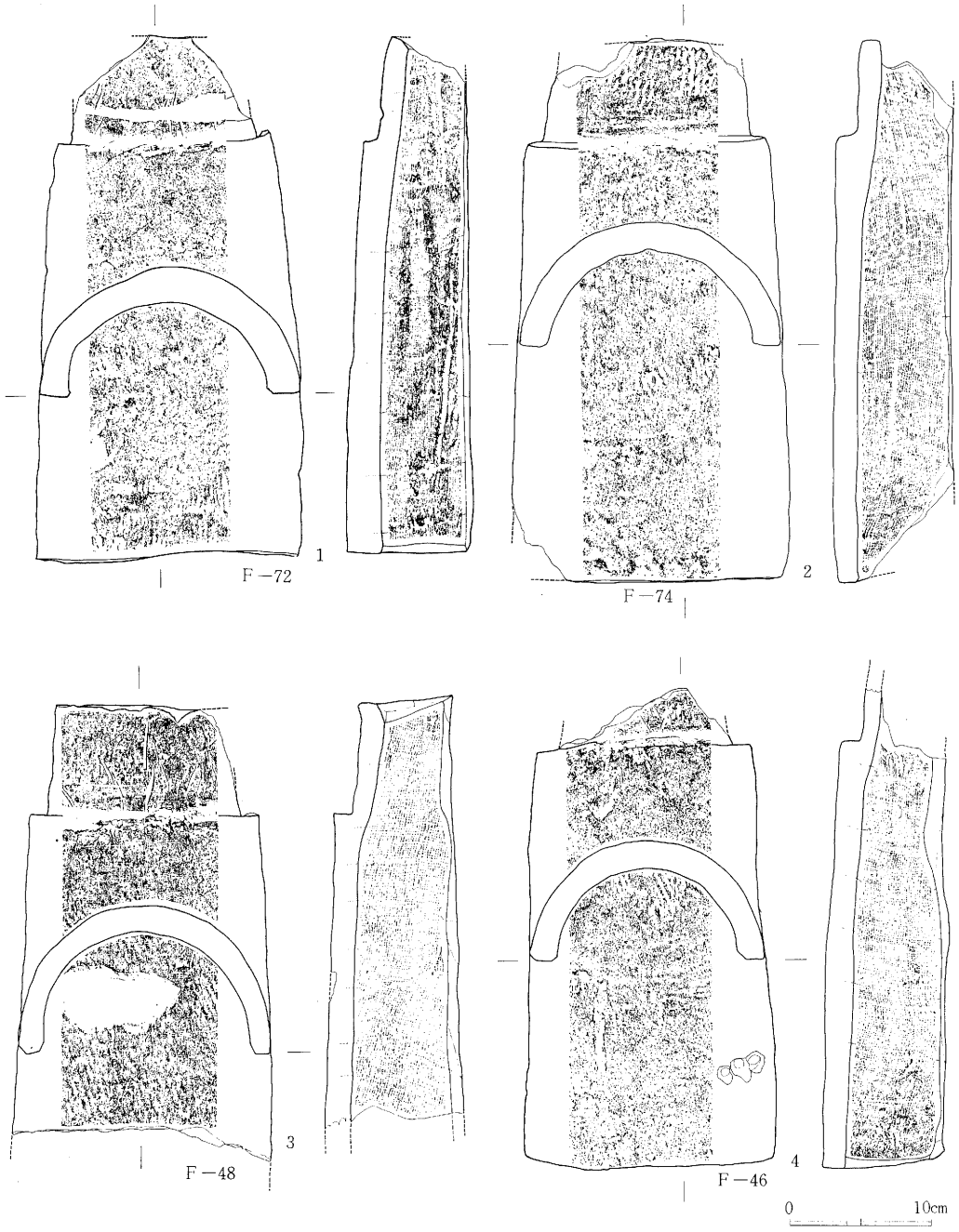
第21図　出土遺物近世瓦・道具瓦・平瓦



平　瓦

番号	登録番号	器形	地区遺構	層位	凸面	凹面	残存	写真図版
1	G－96	平瓦	A－1，SK－5	堆土	縄叩目，糸切痕	布目スリケシ，糸切痕	2/3	23-1
2	G－62	平瓦	A－3，SK－3	堆土	縄叩目	布目痕　糸切痕あり	2/3	23-2
3	G－91	平瓦	A－3，SK－3	堆土	縄叩目	布目痕	2/3	23-3
4	G－93	平瓦	A－3，SK－3	堆土	縄叩目	布目痕スリケシ	2/3	23-4

第22図　出土遺物　平瓦



丸　瓦

番号	登録番号	器形	地区遺構	層位	凸面	凹面	残存	写真図版
1	F－72	丸瓦	A区　SK－3	堆土底面	縄叩き目，ナデ	布目・輪積痕	1/5	23－7
2	F－74	丸瓦	A区　SK－3	堆　土	縄叩き目	布目・〃	1/6	23－8
3	F－48	丸瓦	A拡張区，SK－3	堆　土	縄叩き目	布目・〃	1/6	23－5
4	F－46	丸瓦	A区　SK－5	堆　土	縄叩き目スリケシ	布目・〃	1/6	23－6

第23図　出土遺物　丸瓦

丸瓦、平瓦、丸瓦、文字瓦、道具瓦、その他の瓦等である。分類については、陸奥国分寺跡(陸奥国分寺跡発掘調査委員会編）調査報告書の分類基準に準じている。

軒平瓦

軒平瓦は、重弧文、山形文、連珠文、偏行唐草文、均整唐草文等が出土している。総数82点である。

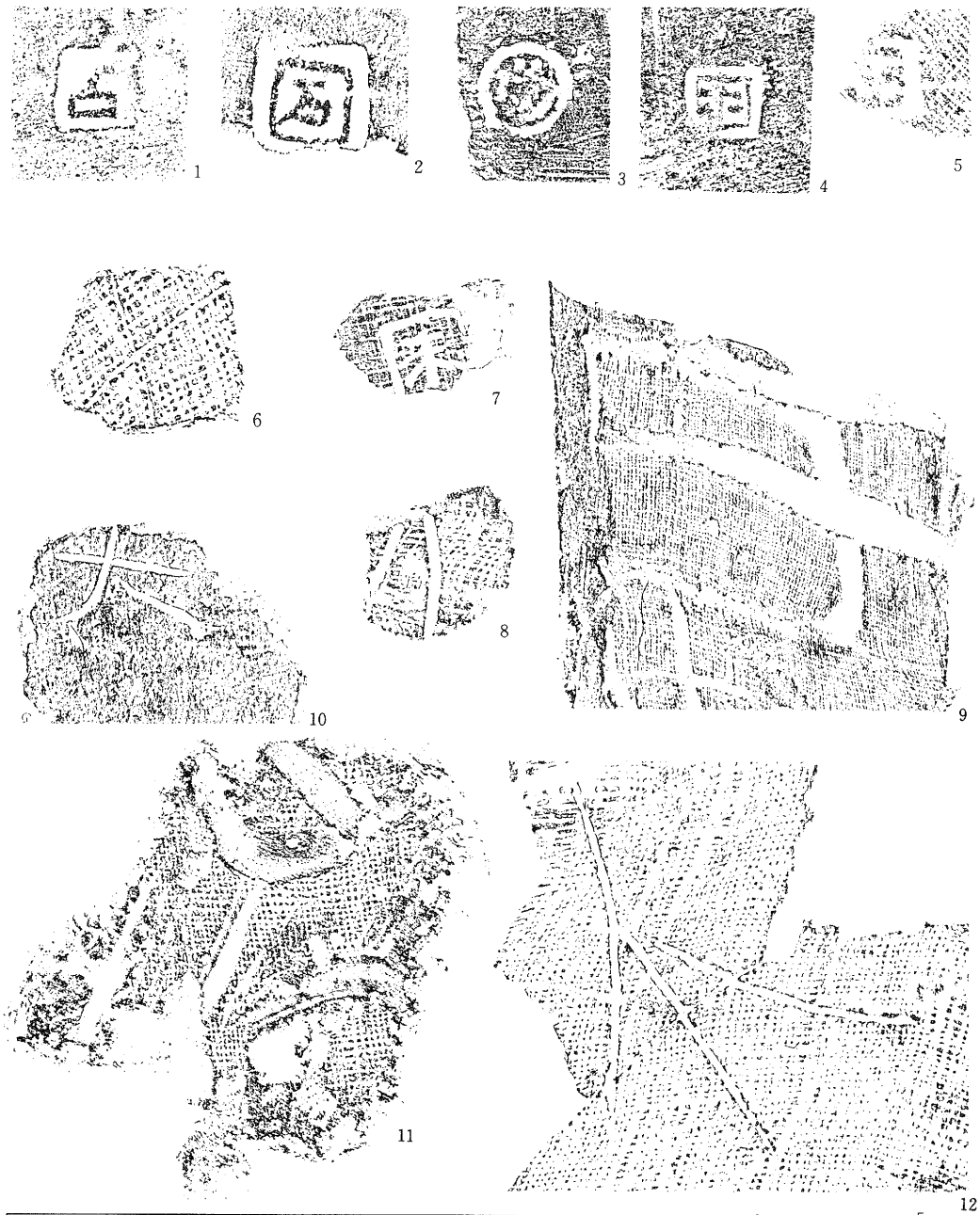
重弧文（第13図３・５､図版24－５・６)は､Ｂ区第Ⅳ層、SK－３土壙堆積土から出土している。破片を含め７点出土している。重弧文３は､瓦当面に幅0.9～1.1cm、深さ0.5～0.7cmの二重の太い沈線、顎面は、深顎で二重の太い沈線、鋸歯文が描かれており、顎部未端の二本の沈線は、鋸歯文より先行して施されている。陸奥国分寺跡出土の重弧文は、ほとんどⅠ類であると思われる。５は、顎部未端の沈線上に朱が付着しているのが認められる。

山形文（第14・15図　図版25・26）は、ＳＫ－３土壙、ピットNo.２、第Ⅳ層等から破片を含めて総計17点出土している。瓦当面には、連続山形文を太い篦状のもので描き、山形文に規則性は認められない。(第15図４、図版25－１)は、波状の山形文であり、(第15図５、図版25－３）は、瓦当面の両端部まで太い篦状のものが描かれ、山の数は、５個及び６個が多いようである。顎部凸面の調整を観察すれば、ほとんど縄叩き目で、のち顎端部は、スリケシが施されている。(第15図３、図版25－２)は、顎部凸面縄目のないもので、全面スリケシが施され、朱が幅５cm程で付着している。

連珠文（第13図１・２、図版26－３、図版25－６）は破片を含め総計８点出土している。（第13図１、図版26－３）は、Ⅰ類でＳＫ－２土壙から出土し、瓦当面に大型の珠文を並べている。（第13図２、図版25－６）は、Ⅱ類で、ＳＤ－２溝跡から出土している。珠文と珠文に上下の縁の間に三角形の部分を残しており、陸奥国分寺出土の連珠文の中で多い種類である。

偏行唐草文（第13図、第20図、図版24－1・2・3・4・7)は、破片を含め総計40点出土し、陸奥国分寺跡の軒平瓦の中で最も多く出土している。(第20図、第13図７、図版24－７）は、Ⅰ類でＢ区Ⅳ層及びＳＫ－３土壙から出土している。Ⅰ類は渦状に走る唐草文を太い隆線であらわし、上下に細線で珠文を配している。顎部は深顎有段である。７は、凸面が縄叩きのち、目の荒い斜格子状に叩き消している。（第13図４・６）は、Ⅲ類で、Ｂ区第Ⅲ層、ＳＤ－２溝跡から出土している。Ⅱ類はⅠ類に類似し、瓦当面に渦状に走る太い隆線が平担で浅くなっており、上下の珠文間の細線がないものである。（第16図２、図版24－４）は、Ⅳ類で、ＳＫ－５瓦溜め遺構から出土している。Ⅳ類は、太い隆線であらわす唐草文が第Ⅰ・Ⅲ類と異なって、左から右に走る唐草文をもち、顎部は、無段で横縄叩き目、が施されている。

均整唐草文（第15図・第16図）は、破片を含め総計10点出土している。Ⅰ類はＢ区Ⅲ層から出土している。Ⅰ類は、瓦当面の中央から左右に唐草文が伸びている。顎部には沈線と波状に



番号	登録番号	器形	地区遺構	層位	凸面	凹面	分類	写真図版
1	F－2	丸瓦		表土		布目	刻印	30－1
2	F－50	丸瓦	A区	根の攪乱	「万」	布目	〃	30－2
3	F－87	丸瓦	A区	Ⅲ層	「？」	布目	〃	30－3
4	F－64	尤瓦	A-1SK－5	堆土	「玉」？		〃	30－4
5	G－102	平瓦	A区	Ⅱ層	叩き目	布目「？」	〃	30－5
6	F－86	丸瓦	築地崩壊土	Ⅳ層	「×」「＋」	布目	篦書き	30－7
7	G－1	平瓦		表土	縄叩き目	布目「？」	刻印	30－6
8	F－85	丸瓦	A区	Ⅲ層		布目	篦書き	30－8
9	F－53	丸瓦	A区SK－3	堆土	ナデ	布目	指書き	30－10
10	G－77	平瓦	SK－5	堆土	叩き目	布目「大」	篦書き	30－9
11	G－41	平瓦	A区	Ⅳ層	縄叩き目	布目	指書き	30－11
12	F－28	丸瓦	B拡張区	Ⅳ層	ナデ	布目	篦書き	30－12

第24図　出土遺物　文字瓦

連続して描かれた鋸歯文が見られる。（第15図１、２、第16図１、図版25－５、図版26－２・５）は、Ⅱ類で、ＳＫ－５瓦溜の遺構から出土している。Ⅱ類は、均整唐草文の中でも出土量が多く、瓦当面の唐草文は、陰刻か陽刻かはっきりせず、顎部は無文である。

軒丸瓦

重弁蓮華文は、第Ⅰ～Ⅴ層、各遺構から総計46点出土している。第Ⅰ～Ⅳ類まで出土し、特にⅣ類は、９点を数える。（第17図１、図版27－１）は、Ⅰ類で、SK－５瓦溜め遺構から出土している。Ⅰ類は、花弁の弁端が盛り上がり、中房上の蓮子が１個の珠文を中心に４個の小花弁状のものが十字形に配しており、瓦当直径は、21.7cmを計る。（第17図２、図版27－３）は、Ⅱ類で、SK－３土壙から出土している。Ⅱ類は、Ⅰ類に類似するが、中房上の蓮子が円形になっている。（第17図3・4、第18図７、図版28－3、27－5・4）は、Ⅳ類で、第Ⅲ・Ⅵ層、ＳＫ－３土壙、ＳＫ－５瓦溜め遺構から出土している。瓦当直径が19～21cm程である。Ⅴ類は、Ｂ区拡張区第Ⅲ層から出土している。Ⅴ類は、花弁と花弁の間の線が太く、花弁が磨滅している。（第18図９、図版27－６）は、Ⅵ類で、Ｄ区第Ⅲ層から出土している。Ⅳ類は、重弁蓮華文中、瓦当直径が小さく17.6cmを計る。

細弁蓮華文（第19図10・11、図版29－６・８）は、K－３土壙から２点出土している。（第19図10）は、Ⅰ類で、推定直径18.0cm、12葉の細い花弁、蓮子は、中央に一個だけで外区に８個の珠文を配している。（第19図11）は、Ⅱ類で、推定直径17.0cmで20葉の細い花弁、中房に１＋５の蓮子を配して、外区内側に21個の珠文を配していると思われる。

宝相華文（第19図13～16、図版29－1～4）は、破片を含めて５点出土している。（第19図13・14）は、Ⅰ類で、ＳＫ－３埋土、Ａ区拡張Ⅳ層から出土している。Ⅰ類は、推定直径が、いずれも19.0cm、中房中央に大型の蓮子を１個配して円環をめぐらし、外側に４個の珠文を配している。また忍冬花文状のものを８葉を配して外区に８個の珠文を有している。（第19図16）は、Ⅲ類で、ＳＫ－５瓦溜め遺構から出土している。Ⅲ類は、中房中央に５個の蓮子を十字に配して、外区に一条の隆線を巡らしている。（第19図15）は、Ⅳ類で、Ａ区拡張区Ⅲ届、SK－５瓦溜め遺構から出土している。Ⅳ類は、中房に１個の蓮子を配し、三葉状と無果花状の文様を交互に配し、外区には、８個の珠文を配していると思われる。

歯車文（第19図12、図版29－５）は、Ｂ区拡張区第Ⅳ層から出土している。推定直径19cm、８個の舌状の文様が歯車状に並び、中央に大型の蓮子を有する。

桜花様文（第18図6、図版29－９）は、１点だけＡ区第Ⅳ層から出土している。これまで陸奥国分寺跡調査で、１点、講堂西側基壇上から出土したのみである。瓦当面は推定直径17.5cm、破片の為、全体の形は不明であるが、５枚の花弁を有する桜花状の花文を配していると思われる。

平　瓦

平瓦(第22図1～4､図版23－1～4)は､出土遺物中、破片を含め大半を占めており、第Ⅰ～Ⅴ層から出土し、特にSK－3土壙、SK－5瓦溜め遺構から、整理用平箱で、60箱出土している。そのうち図化しえたのは、4点程である。凹面は、目の細い布目が多く、全体的にスリケシされたのが大半を占め、中央部分に布目を残し、両側端にスリケシされている。また(第22図1)は凹面に糸切り痕が放射状に残っている。凸面は、縦方向に縄叩きされているのが大半を占めているが、一部斜の方向のもの、一部スリケシが施されているものもある。全体的に平瓦を概見すれば、ほぼ同様の調整技法が施され、凹面は、糸切り→布目→スリケシ、凸面は、縦方向の縄叩きのち一部スリケシが施されている。形状は長方形に近く、長さ36～38cm程、広端幅27～28cm程、狭端幅23～25cm程と思われる。全体的に大きな違いは認められないが、中には(第21図7)の凸面に、斜格子叩き目が施され、また(第21図8)は、凸面が、縄叩きされ幅3.5cm、長さ7cmの単位で縄叩き目を叩き消しているのが見られる。

丸　瓦

丸瓦(第23図1～4､図版23－5～8)は､小破片を含め多量に出土し､第Ⅰ～Ⅴ層､及び各遺構から出土している。そのうち図化しえたのは、4点である。丸瓦は、玉縁付の有段丸瓦で、粘土紐巻作りである。筒部凸面は、縄叩きのちナデ調整を施している。筒部凹面は、布目、一部ナデ調整が施されている。玉縁部は、回転を利用してナデ調整され、筒部より玉縁端にかけて少々器高が低くなるものがある。

道具瓦

隅切り瓦(第21図6、図版31－2)は、B区Ⅴ層出土で、1点出土している。右上の広端縁隅から側縁にかけての破片で、凹面布目、凸面縄叩きである。隅切り瓦は、広端縁隅右上から左下へ約50°の角度で切り落している。

熨斗瓦(第21図5、図版31－1)は､A区SK－3土壙堆積土出土である｡凸面は縄叩き目､凹面は布目で糸切り痕跡が残り、端部を整形している。瓦の全形は不明であるが、残存する狭端幅が16cmを計る。陸奥国分寺跡出土の平瓦は、遺存するものから計ると、長さが36cm～38cm程、広端幅が27～28cm、狭端幅が24cm前後と推定される。推定の域ではあるが、熨斗瓦の長さは平瓦とほぼ同一と思われ、平瓦を分割すれば、⅔分割になると推察される。ただ1点だけの出土の為、今後の増加を期したい。

文字瓦

瓦に文字を記した文字瓦は、文字のあらわし方に刻印を捺したもの、指先で書いたもの、箆で書いたもの等、三種類がある。

刻印文字瓦(第24図1～5､7､図版30－1～6)は､表土から3点､A区第Ⅱ層から1点､A区第Ⅲ層

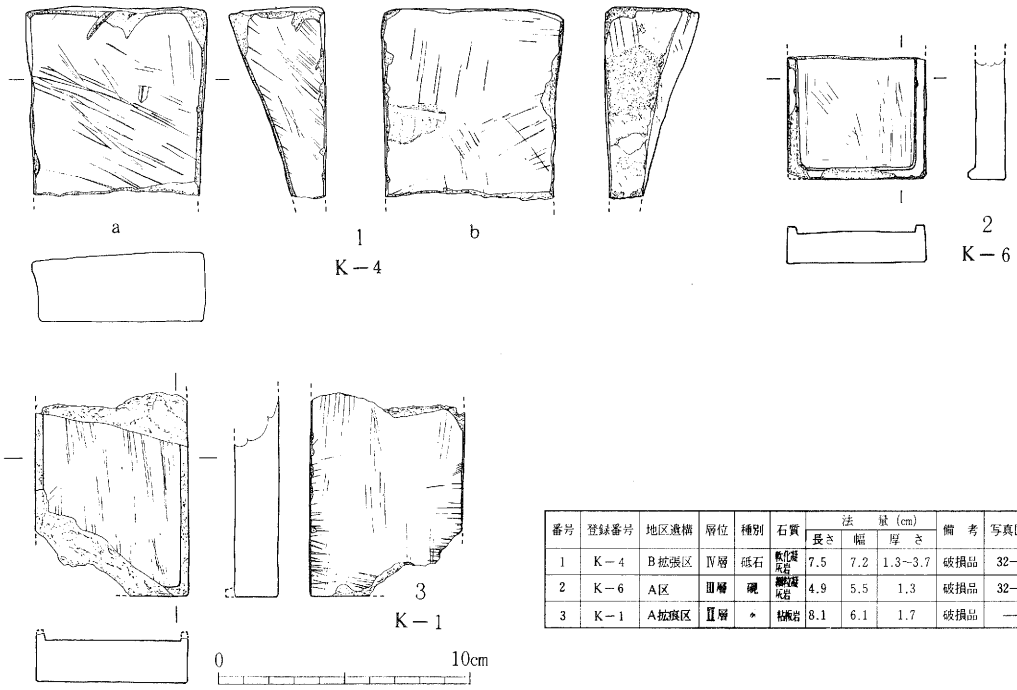
から１点、ＳＫ－５瓦溜め遺構堆積土から１点、合せて６点出土している。その内判読出来るものは、「万」、「占」、「未」と３点である。刻印されている瓦は、丸瓦・平瓦で、丸瓦では、凸面に刻印され、（第24図１）は、玉縁部付近の筒部に「占」と刻印されている。また（第24図３）は、凸面に直径2.7cmの丸形で刻印されている。（第24図５・７）は、凹面布目に刻印されている。

指書文字瓦（第24図９・11、図版30－10・11）は、Ａ区Ⅳ層、ＳＫ－３土壙堆積土出土のもので、２点出土している。（第24図11）は、平瓦凹面布目に指書され、破片の為、判読不明である。また（第24図９）は、丸瓦凹面布目に指書されているが判読不明である。

ヘラ書き文字瓦（第24図６・８・10・12、図版30－７・８・９・12）は、Ａ区第Ⅲ層、第Ⅳ層Ｂ区拡張区第Ⅳ層、Ｃ区第Ⅲ層、ＳＫ－５瓦溜め遺構等から５点出土している。ヘラ書きされているのは、平瓦が凹面布目、丸瓦が凹面布目で、大半は、判読不明である。（第24図10）は、ＳＫ－５土壙出土のもので、凹面布目に「大」とヘラ書きされ、また（第24図６）は、Ａ区第Ⅳ層出土のもので、丸瓦凹面布目に、「×」か「＋」がヘラ書きされている。

その他の瓦

その他の瓦は、第Ⅰ～Ⅳ層、SD－1溝跡等から合計24点出土している。軒平瓦（第21図４、図版31－８）は瓦当の厚みが薄く、瓦当面に菊花、左右に唐草を配したものと思われ、同一文様の瓦を４点出土している。軒丸瓦（第21図１・３、図版31－6・7）は、瓦当面に円形の九曜文を



番号	登録番号	地区遺構	層位	種別	石質	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	K－4	B拡張区	Ⅳ層	砥石	軟質凝灰岩	7.5	7.2	1.3～3.7	破損品	32－5
2	K－6	A区	Ⅲ層	硯	細粒凝灰岩	4.9	5.5	1.3	破損品	32－6
3	K－1	A拡張区	Ⅱ層	〃	粘板岩	8.1	6.1	1.7	破損品	——

第25図　出土遺物　砥石・硯

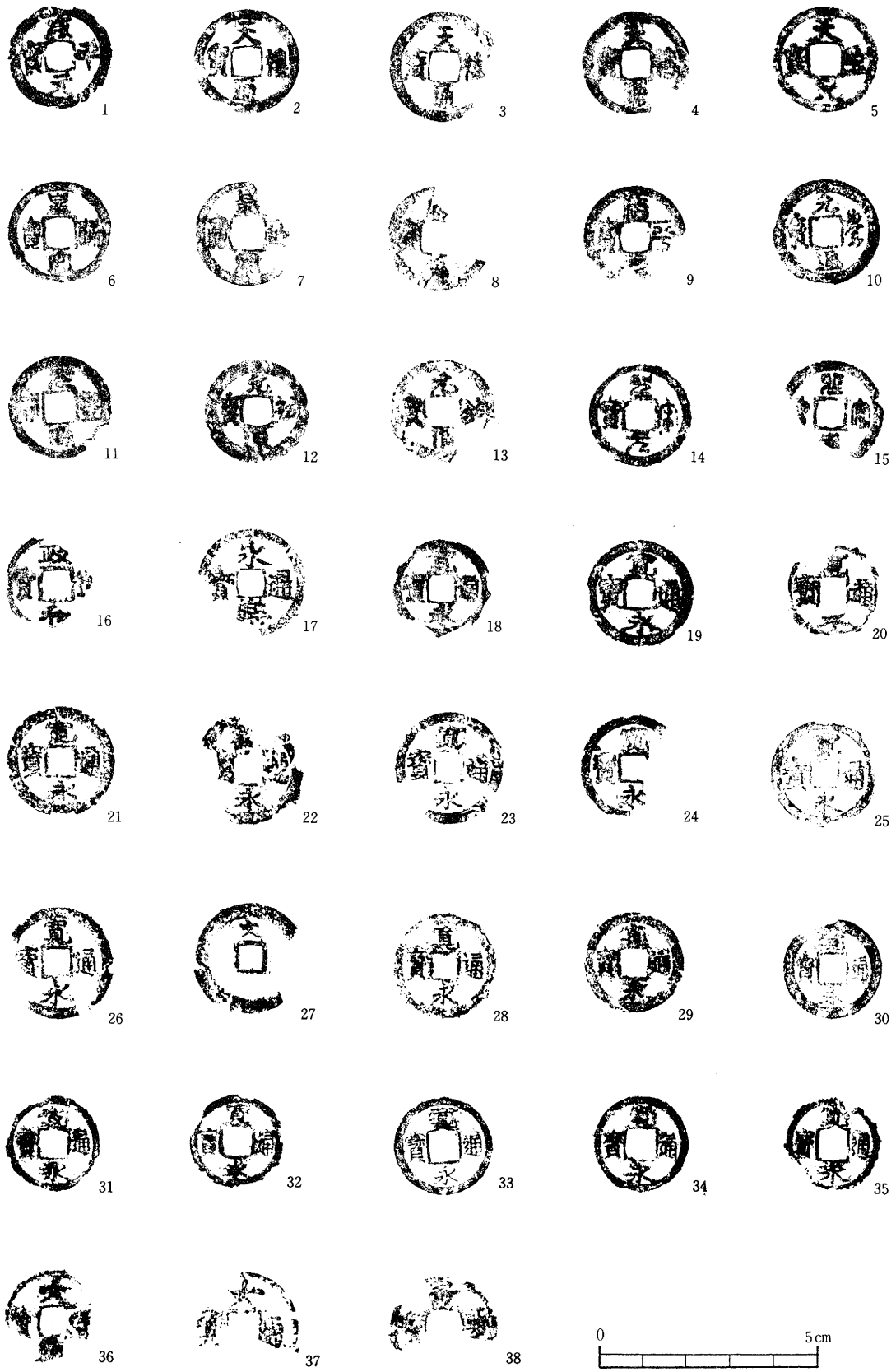
第４表　古銭観察表

No	銭　名	地区遺構名	層　位	時代	初鋳年（西暦）	素材	備　　考	遺物番号
1	咸平元寶	A区	Ⅲａ層中	北宋	咸平元年（998）	銅		N－19
2	天禧通寶	A区	Ⅲａ層中	〃	天禧年間（1017～）	〃		N－24
3	〃	A区	〃	〃	〃	〃		N－22
4	〃	A区	〃	〃	〃	〃		N－23
5	天聖元寶	A区	Ⅲａ層中	〃	天聖元年（1023）	〃		N－20
6	皇宋通寶	A区	〃	〃	宝元２年（1039）	〃		N－26
7	〃	A区	〃	〃	〃	〃		N－25
8	〃　？	A区	Ⅲａ層中	〃	〃	〃		N－37
9	治平元寶	A区	〃	〃	治平元年（1064）	〃		N－27
10	元豊通寶	A区	Ⅲａ層中	〃	元豊元年（1078）	〃		N－21
11	〃	A区	〃	〃	〃	〃		N－28
12	元祐通寶	A区	〃	〃	元祐元年（1086）	〃		N－29
13	〃	A区ＳＫ-4		〃	〃	〃		N－14
14	聖宋元寶	A区	Ⅲａ層中	〃	建中靖国元年(1101)	〃		N－30
15	〃	A区ＳＫ-4		〃	〃	〃		N－17
16	政和通寶	A区ＳＫ-4		〃	政和元年（1111）	〃		N－16
17	永楽通寶	A区		明	永楽６年（1408）	〃		N－33
18	寛永通寶	A区	Ⅲａ層下	江戸	寛永３年（1625）	〃	古寛永狭穿	N－32
19	〃	B区	Ⅱ　層	〃	寛永14年（1637）	〃	高田銭古寛永	N－ 7
20	〃	A区	Ⅲ　ａ　層	〃	〃	〃	高田銭肥永小字古寛永	N－12
21	〃	A区	Ⅱ　層	〃	〃	〃	古寛永建仁寺銭	N－10
22	〃	A区ＳＫ-4		〃	〃	〃	〃　岡山銭長嘯子進点寛	N－15
23	〃	A拡張区	Ⅲａ層	〃	〃	〃	〃　岡山銭長嘯子肥字	N－34
24	〃	A区	表　採	〃	〃	〃	〃　仙台銭	N－31
25	〃	B区	Ⅲａ層	〃	寛文８年（1668）	〃	新寛永正字文	N－13
26	〃	A区	Ⅲａ層	〃	享保13年（1728）	〃	〃　重揮通無背（石巻）	N－ 8
27	〃	B区	Ⅱ　層	〃	元文元年（1736）	〃	〃　輪十鋳込	N－ 6
28	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　虎ノ尾寛	N－ 7
29	〃	A区	〃	〃	元文２年（1737）	〃	〃　小梅手仰寛	N－ 4
30	〃	—	〃	〃				N－ 3
31	〃	A区	Ⅲａ層	〃				N－ 9
32	〃	B区	Ⅱ　層	層				N－18
33	〃	A区	Ⅱ　層	層				N－35
34	〃	A区	〃	〃				N－36
35	大（ ）（ ）寶	A区	Ⅲａ層	—	—			N－11
36	大（ ）通寶	A区	Ⅲ　層	—	—			N－38
37	判読不能	A区	Ⅱ　層	—	—			N－39

配したもので５点出土している。また小破片であるが、邑文軒丸瓦を６点出土している。丸瓦は、玉縁付のもので、４点出土している。凹面布目で、そのうち１点は、凹面布目に幅１cm程の溝状の筋目が３本見られる。また玉縁部長は5.1cmを計る。平瓦は２点出土し、１点は側端部付近に一辺１cm四方の穴を柄っている。これらの文様及び、器形等から、その他の瓦はいずれも近世以降の瓦と思われ、薬師堂関係の屋根に葺かれたものと考える。

陶磁器

陶磁器は、ほとんど破片で、図化しえたのは、７点である。出土した遺物は、全てⅠ層から


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
5cm

第26図　出土遺物　古銭

Ⅲ層、及び旧トレンチ内埋土から出土したものである。碗（第12図１）は、Ⅱ層出土で、体部外面下半の破片で、数条の稜を有し、外面が赤褐色の鉄釉、内面が灰オリーブ色の灰釉を施している。この種の器形は、福島県金谷館跡、多賀城跡作貫地区から出土している碗に類似する。小鉢（第12図４）は、旧トレンチ内から出土しているが、特徴等から明治初期の平清水のものと思われる。皿(第12図５)は、野草の染付を配したもので、底部外面に、断片であるが、「福」と描かれていることから伊万里と考える。全体的に破片を概観すると、江戸時代中期以降のものが大半を占めている。さらに産地については、半数が相馬、上野目と思われ、若干伊万里が含まれ、中には17ｃ初期のものが見られる。

石製品（第25図１～３、図版32－５・６）

砥石（第25図１、図版32－５）：Ｂ拡張区基本層位Ⅳ層より１点のみ出土している。破損品のため、全長は不明である。ａ面は使用による消耗のためか、中央部付近が著しい凹状を呈す。ａ．ｂ、左右側面とも傷状の擦痕が多数認められ、特にａ面は深く明瞭である。

硯（第25図２・３、図版32－６）：Ａ(拡張）区基本層位Ⅱ・Ⅲ層より各１点出土した。ともに海部を欠損する長方硯である。２は３に比べ一回小さい。両者とも平面形は長方形で、側面は垂直に立ち上がる長方形のものと思われる。陸部は隅丸長力形(２)、長方形(３)、周縁は１段（３は欠損のため不明)、裏面はともに平担面を呈する。尚、３の裏面縁辺には、傷状の擦痕が認められる。

金属製品（第26図）

古銭(第26図)：Ａ・Ｂ区基本層位Ⅱ～Ⅳ層より32点、ＳＫ－４より４点に表採資料の１点を加えた計37点出土した。これらの内、中国銭は19点(１～17、35、36)、日本銭は17点(18～34)、生産地不明のものが１点(37)である。中国銭は、判読可能なものの内、永楽通宝（17）の１点を除き、他は全て北宋銭である。北宋銭には初鋳年998年の咸平元宝(１)から1111年の政和通宝(16)までの９種類が認められる。日本銭は全て寛永通宝で、古寛永が８種８枚(19～25)、新寛永が５種９枚（26～34、内31～34は種類不明)である。これら古銭は数枚のまとまりをもって出土する場合が多く(一括出土Ａ～Ｄ)、その内の３点(１・５・６)、８点（２～４・６・９・11・12・14）は密着し出土した。尚、基本層位Ⅳ層中よりは、永楽通宝（初鋳年1408年）１点のみの出土で、日本銭の混在は認められなかった。

鉄滓(図版32－８・９)：Ａ～Ｄ区基本層位Ⅰ～Ⅳ層より８点、遺構内(ＳＫ－１・３・５)より７点の計15点出土した。ほとんどが外面粗髯で、埦形を呈し、多くは凸部に粘土を付着する。８はＳＫ－３堆積土出土のものである。出土資料中では最も大形（約15×11×６cm）のもので、凸部には粘土の付着が顕著に認められる。９はＳＫ－１堆積土出土のものである。厚さ約6cmの粘土上に鉄滓が付着したような状態で、鉄滓中に木炭が噛み込まれている。粘土中にはスサが

入れられており、おそらくこの粘土部分は、炉床あるいは炉壁の一部分かと思われる。これら鉄滓の外面観察からは、その多くは鍛冶滓に属するかと考えられる。

土製品（第12図８・９・10、図版32－７）

羽口：D区基本層位より２点、SD－２より１点の計３点出土した。全て破片資料で、全体の形態の判るものはない。８と９は同一個体の可能性もある。外径は８が約5.5㎝、９・10が約6.5㎝、孔径はともに2.5㎝前後、器厚は８が約1.5㎝、９・10が約２㎝で、９・10の方が８よりひとまわり大きい。外面は縦位の削りによる整形後、横位のナデによる調整が行なわれるもの（９）と、調整が行なわれないもの（８）に別けられる。内面には８・９とも斜位の擦痕が認められる。これは棒状のものに粘土を巻き付け羽口を製作し、最後に回転しながらこれを引き抜いた際の擦痕とも考えられる。資料は全て二次加熱による赤色化が顕著で、炉体側と思われる部分の外面には、鉄滓の付着がみられる。

Ⅴ．ま　と　め

今回の調査は、環境整備に伴う、南大門跡東脇築地跡の発掘調査である。

築地跡の調査は、過去数回行なわれており、特に昭和31年度には、現仁王門の東端から真東14.4m の地点、さらに63m の地点に調査区を設定している。その結果、「黄褐色を呈する自然の地山を22尺幅に削って整地し、その上に土塁を造成…」と報告している。また昭和48年度の南辺築地跡の調査では、築地本体の遺存幅が2.2ｍ、現存する高さが50～60㎝、また黄色土、黒色土による細かい互層を形成し版築していること等が、判明している。これらから、陸奥国分寺跡の南辺の区画施設の構造が明らかにされつつある。

今回の調査では、築地跡の遺存状況、築地基礎事業等の確認と、昭和31年時の調査成果を補強する目的で実施した。これまでの調査では、現仁王門の位置に、陸奥国分寺南大門跡であることが確認され、また南大門跡真東延長線上一帯は、現在でも土塁状に高まりが確認されている。築地跡は、木の根、民有地のブロック塀等の攪乱により削平されているが、遺存状況の良好な所で、旧表土を南北幅3.1ｍ程掘り込み、築地基底面からの残存高0.4m 程、築地幅2.7m である。遺存する築地跡内外から10数個検出されたピットは、柱穴の間尺が不規測であり、また検出状況等から築地跡に伴う寄柱としては確認出来なかった。陸奥国分寺跡伽藍を区画する施設は、これまでの調査で、東辺が築地と溝、西辺が掘立柱列と溝、南辺で築地を確認している。今回の調査で南辺を区画する施設は、築地と築地の外側2.0ｍ程離れた溝であることが一層明らかになった。調査区北半で検出されたSK－５土壙は、瓦類が堆積上層から基底面までほぼ密接してぎっしり積み重なって出土している状況から、瓦溜め遺構と思われる。瓦溜め遺構から出土する瓦には、丸瓦・平瓦であるが、文様瓦も多く、軒平瓦の顎部端部に丹が付着しているもの

も認められる。堆積土層ごとのまとまりが全く認められないが、少なくとも使用され、瓦が廃棄され、埋められたものと思われる。

出土遺物の大部分が瓦類で、整理用平箱で250箱程になり、文様瓦片で152点、その内訳は、軒平瓦82点、軒丸瓦70点である。軒平瓦では、重弁蓮華文が出土軒平瓦の87%、軒丸瓦では、偏行唐草文が出土軒丸瓦の49%、山形文が20%占めている。これまでの調査でも重弁蓮華文・偏行唐草文は陸奥国分寺創建時の組み合わせとして建物に多く使用されたものと思われる。さらに重弁蓮華文の第Ⅰ類～Ⅵ類が出土し、特に第Ⅰ類は中房上の蓮子が十字状になっており、多賀城跡のⅠ期の重弁蓮華文221に類似し、重弁蓮華文の中でも古いものと思われる。出土量の少ない軒丸瓦の宝相華文、細弁蓮華文、歯車文、軒平瓦の均整唐草文、連珠文、山形文、宝相華文等は、陸奥国分寺跡出土の瓦の中で新しいグループに入り、建物の瓦の葺換え用及び、補修瓦と考えられる。また軒丸瓦の桜花様文軒平瓦は、1点出土し、過去の調査でも講堂西側基壇上から1点出土しているだけで類例が乏しく、今後の増加に期待したい。

参　考　文　献

東北古瓦図録　原田良雄・石田茂作　雄山閣

「多賀城跡－政　庁跡図録編」宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所　1980．3

陸奥国分寺跡　陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　河北文化文化事業団　1961．10

陸奥国官窯跡群Ⅵ　古窯跡研究会　1981．3

郡山遺跡Ⅰ～Ⅲ　仙台市文化財調査報告書第29・38・46集　1981～3

史跡陸奥国分寺跡　仙台市文化財調査報告書第27集　1981．3

枡江遺跡　仙台市文化財調査報告書第18集　1980．3

「古代の瓦」　日本の美術66号　1971．11

「国分寺」　日本の美術171号　1980

多摩ニュータウン遺跡Ⅰ　(財)東京都埋蔵文化財センター　1982．3

今泉遺跡　仙台市文化財調査報告書第58集　1983．3

燕沢遺跡　仙台市文化財調査報告書第39集　1982．3

多賀城跡　宮城県多賀城跡調査研究所年報　1980

神明社窯跡　仙台市文化財調査報告書第54集　1983．3

「本瓦葺の技術」　太田博太郎・井上新太郎　彰国社　1974

日本貨幣型録　83年版　日本貨幣商協組合

金谷館跡　福島県文化財調査報告書第82集　1980．3

「相馬のやきもの」　高橋良一　ふくしま文庫　1977．3

日本の陶硯　五島美術館　1978

付　　章

陸奥国分寺跡土壌分析

東北大学農学部助手　山　田　一　郎

陸奥国分寺南大門東脇築地跡土壌の粒度組成は、全層ともシルト(２～20μ)と粘土(２μ以下)が大部分であり、土性は、全てＬic（軽埴土）と細粒である。

版築土層５～６層は黒褐色の土色をもつ部分と明褐色の土色の部分からなり腐植を含む。版築土層８層は暗褐色の層であり腐植を含む。版築土層10～12層は黒褐色の部分から成り腐植を含む。版築土層８層は暗褐色の層であり腐植を含む。版築土層10～12層は黒褐色の部分と黄褐色の部分から成り腐植を含む。

掘り込み事業土層Ｅ層は、黒褐色の腐植に富む層である。

陸奥国分寺遺跡土壌の性質

試料 No.	土色	腐植	粒度組成 (%)				土性
			粗砂	細砂	シルト	粘土	
版築土層　5～6層	7.5YR3/2, 10YR2/6	含む	3	15	38	44	Ｌｉｃ
版築土層　8　層	7.5YR3/3	〃	4	17	36	43	〃
版築土層　10～12層	1 10YR3/2, 10YR3/6	〃	10	18	30	42	〃
掘い込み事業土層E層	7.5YR3/2	富む	5	18	37	40	〃

写　真　図　版

図版 1
調査前全景

図版 2
調査区全景

図版 3
築地跡全景

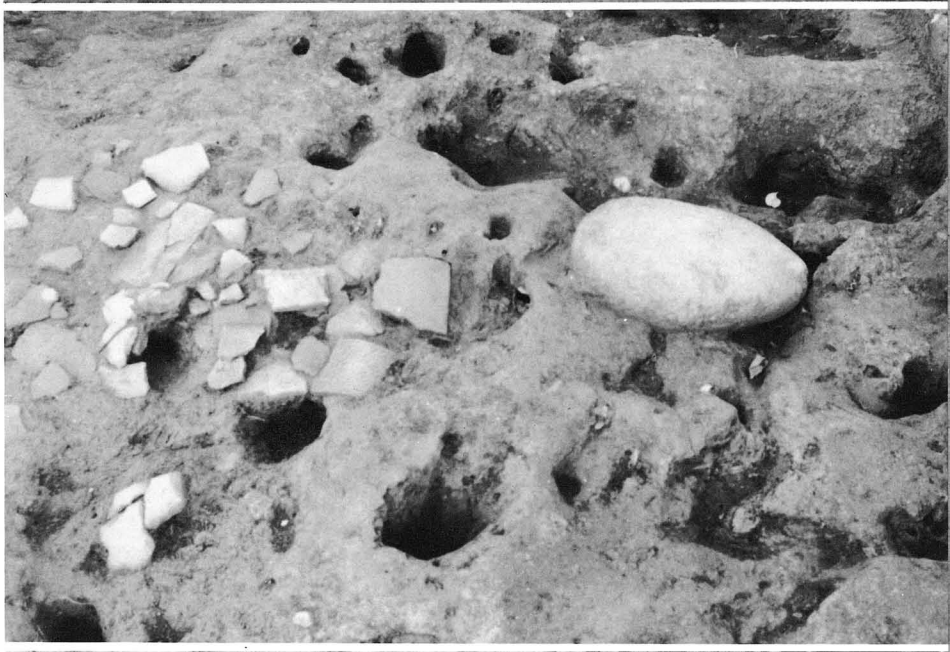
図版 4
調査区北半築地崩
落土上面遺物出土状況

図版 5
SK－3 土壙
遺物出土状況

図版 6
調査区Ⅳ層上面
遺物出土状況

図版 7
ＳＫ－５瓦溜め遺構
遺物出土状況

図版 8
築地跡上面
瓦出土状況



図版 9
ＳＫ－５瓦溜め遺構
遺物出土状況

図版10
築地崩落土上面
遺物出土状況

図版11
SD－２溝跡
遺物出土状況

図版12（左）
SD－２溝跡
遺物出土状況

図版13（右）
SD－２溝跡
遺物出土状況

図版14（左）
文字瓦出土状況

図版15（右）
均整唐草文軒平瓦
出土状況

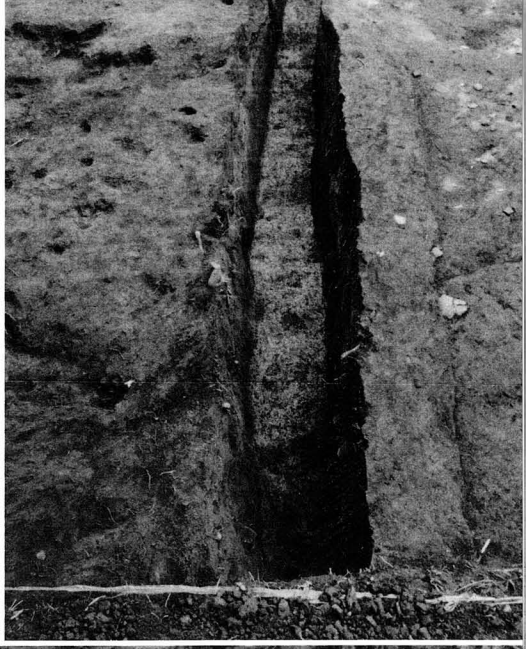
図版16
偏行唐草文軒平瓦
出土状況

図版17
重弁連華文軒平瓦
出土状況

図版18　SK－5瓦溜め遺構断面

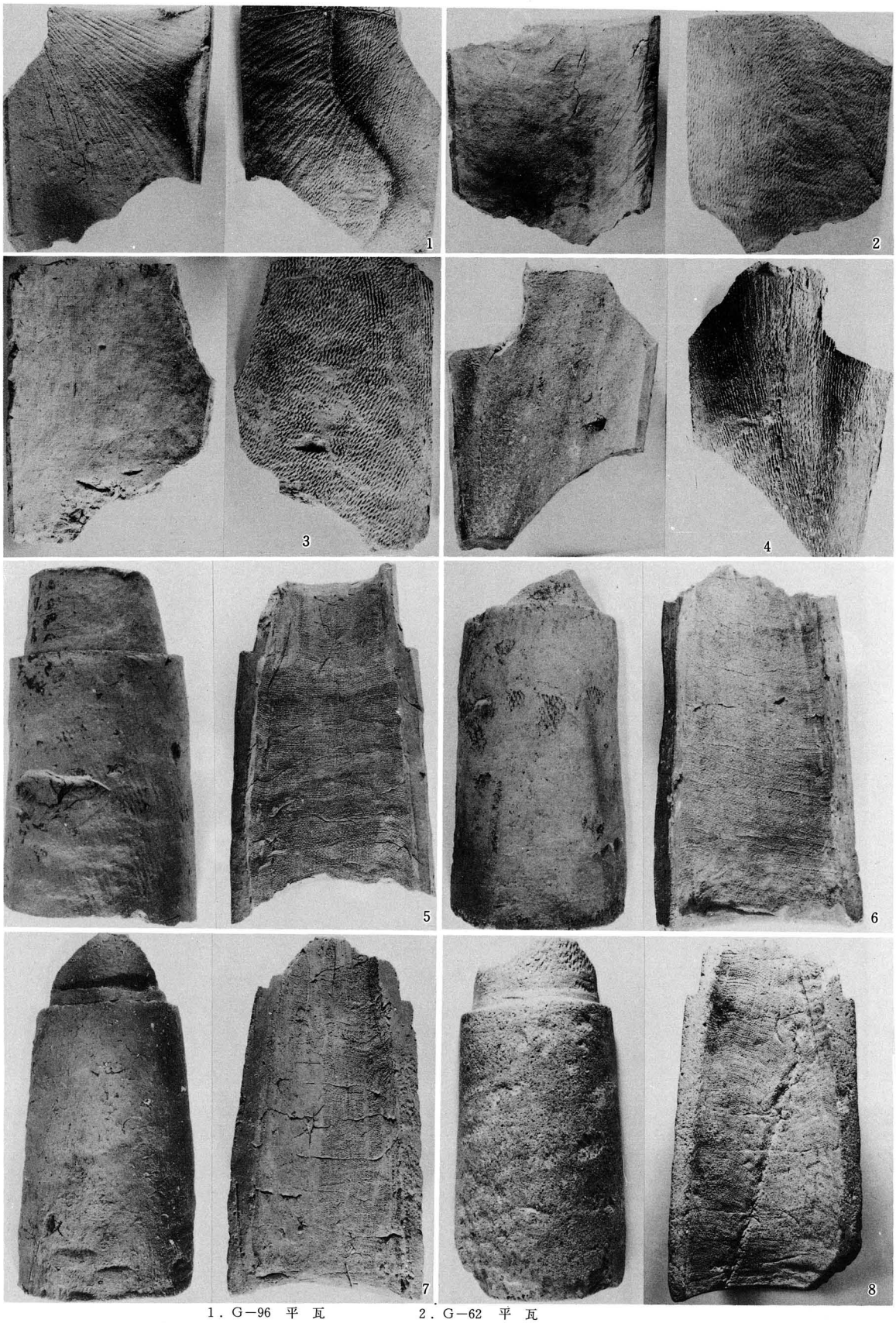
図版19　築地跡基底部断面

図版20
旧トレンチ



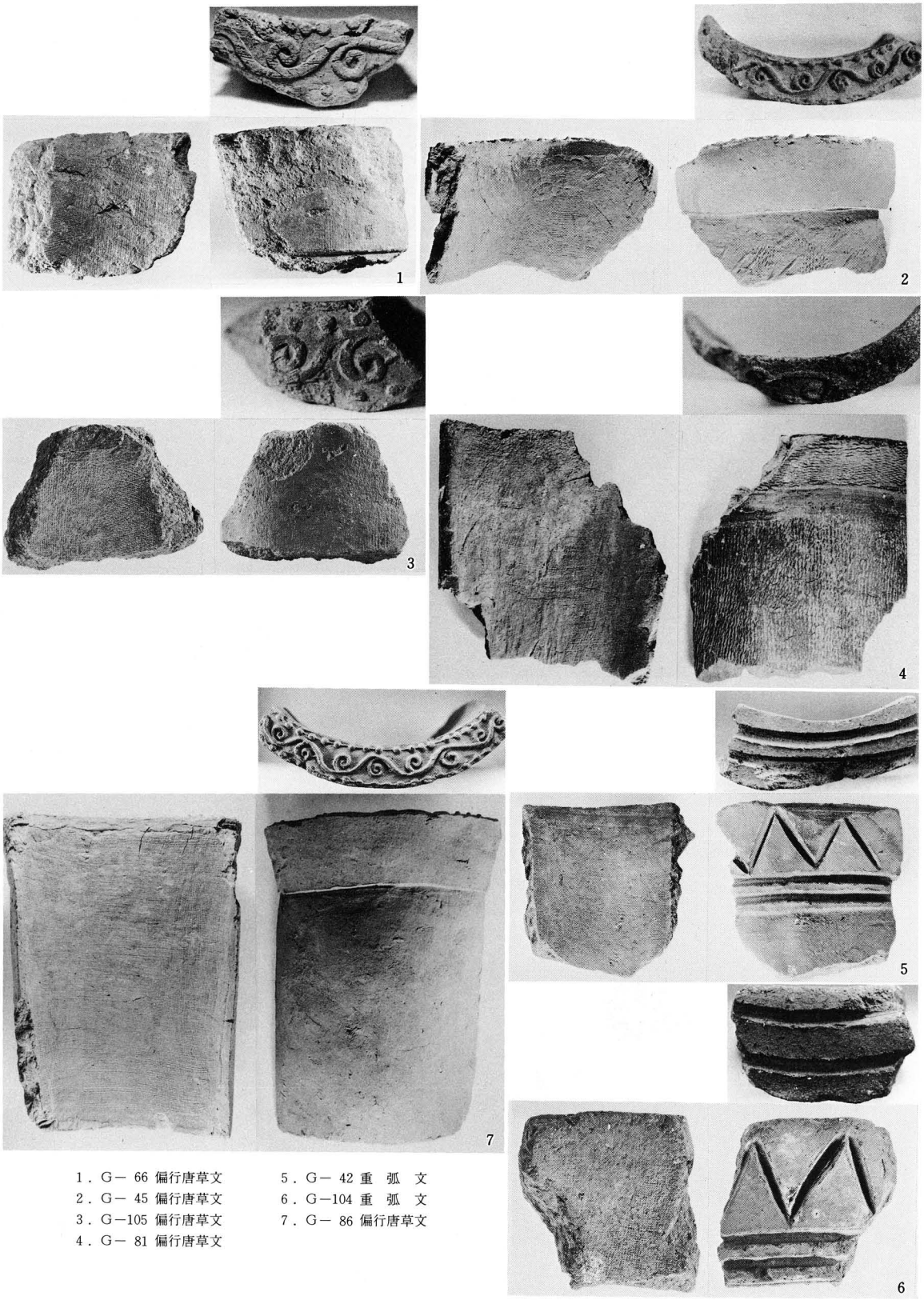
図版21
SK－3・5完掘全景

図版22
現地説明会風景



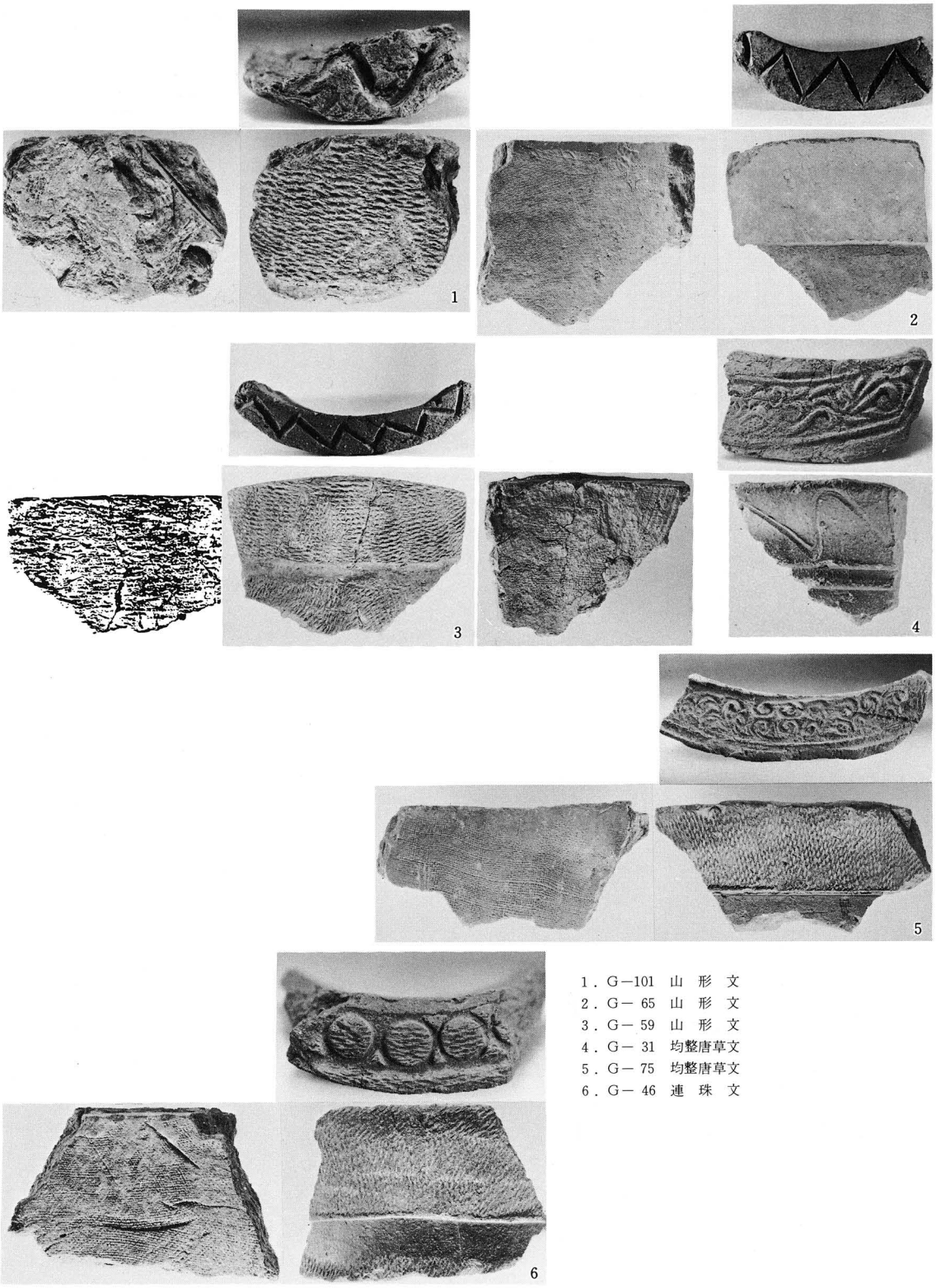
1．G－96　平　瓦　　2．G－62　平　瓦
3．G－91　〃　　4．G－93　〃
5．F－48　丸　瓦　　6．F－46　丸　瓦
7．F－72　〃　　8．F－74　〃

図版23　出土遺物　平瓦・丸瓦



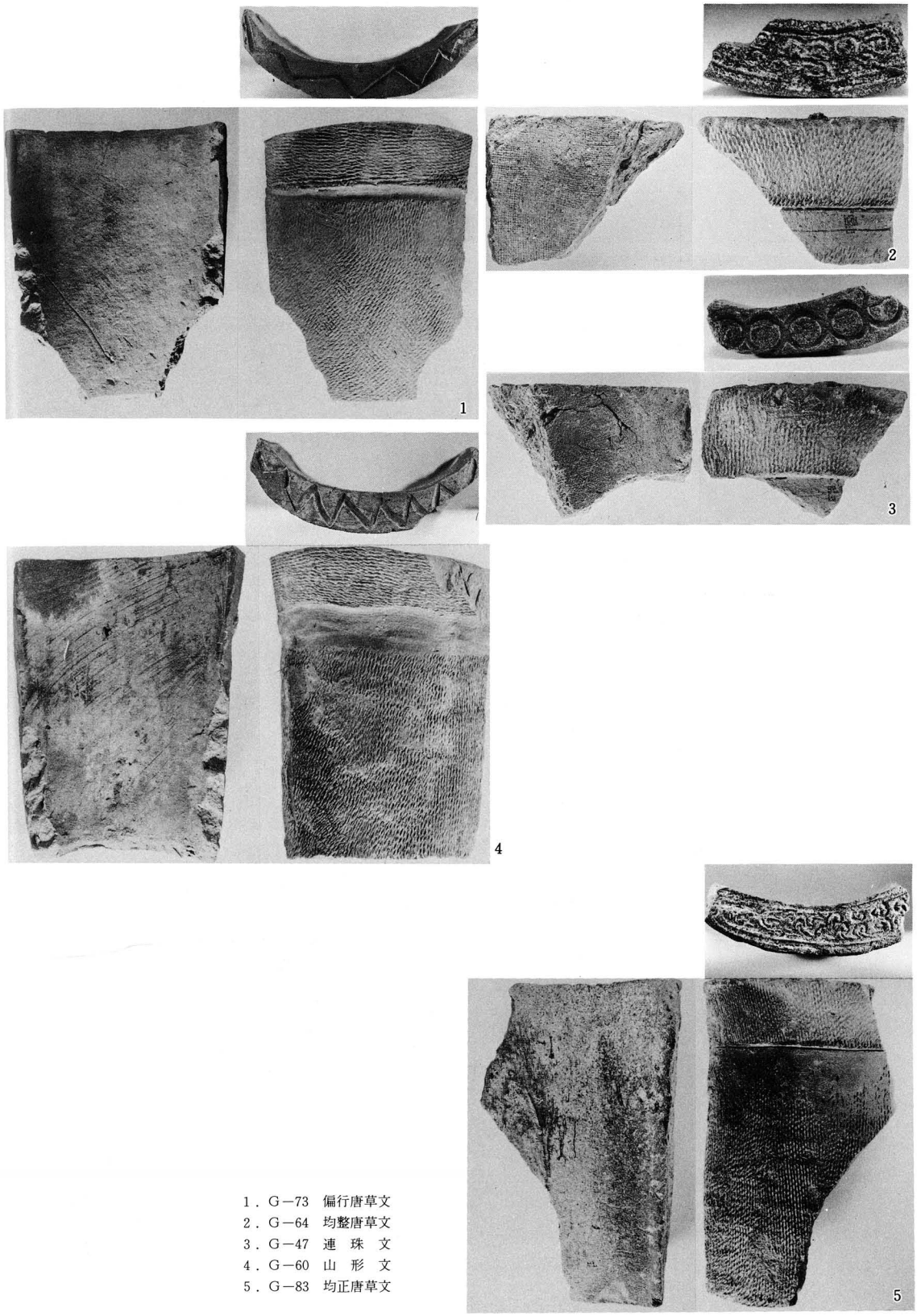
1．G－ 66 偏行唐草文
2．G－ 45 偏行唐草文
3．G－105 偏行唐草文
4．G－ 81 偏行唐草文
5．G－ 42 重　弧　文
6．G－104 重　弧　文
7．G－ 86 偏行唐草文

図版24　出土遺物　軒平瓦



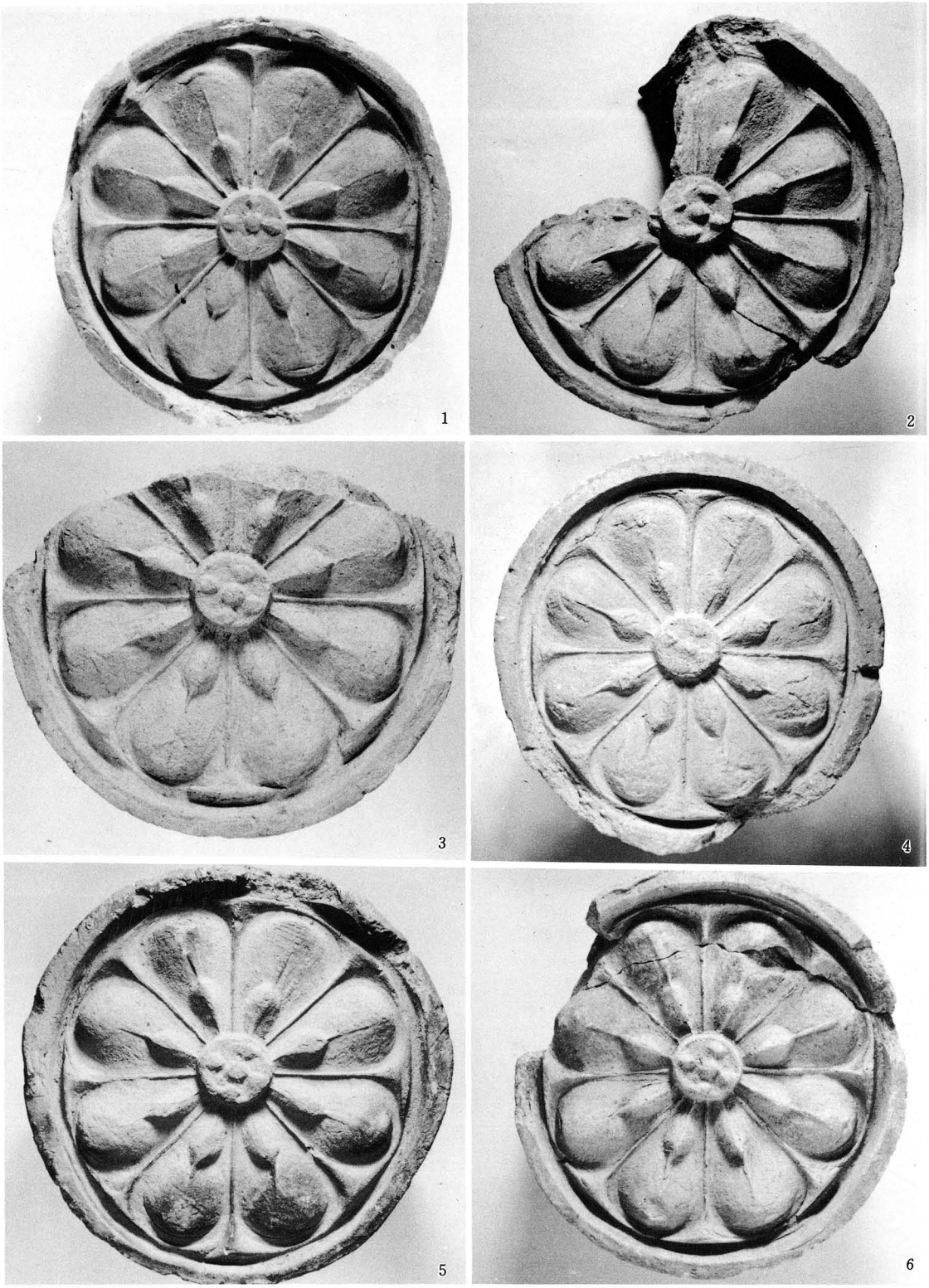
1．G－101　山　形　文
2．G－ 65　山　形　文
3．G－ 59　山　形　文
4．G－ 31　均整唐草文
5．G－ 75　均整唐草文
6．G－ 46　連　珠　文

図版25　出土遺物　軒平瓦



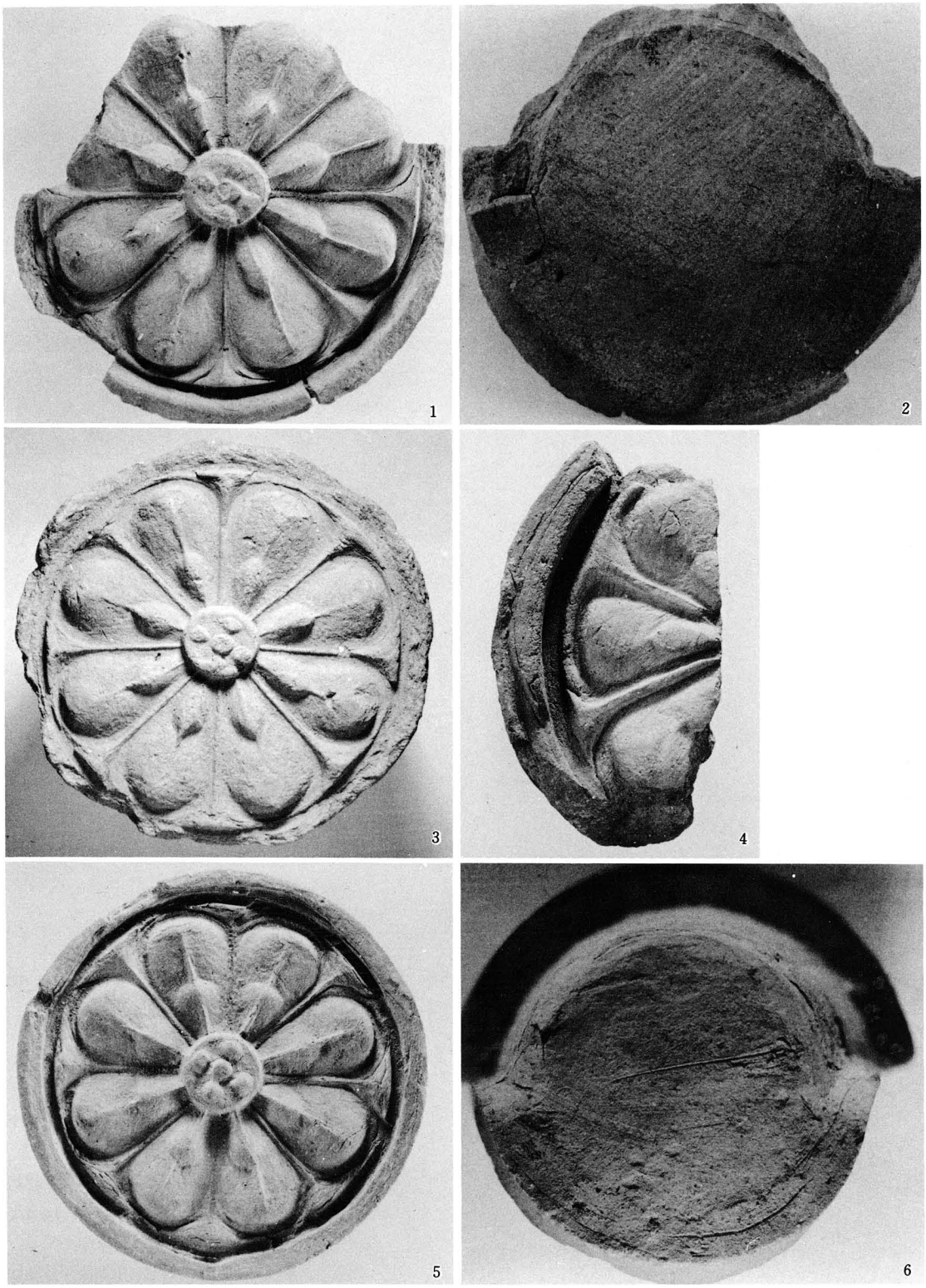
1．G－73　偏行唐草文
2．G－64　均整唐草文
3．G－47　連　珠　文
4．G－60　山　形　文
5．G－83　均正唐草文

図版26　出土遺物　軒平瓦



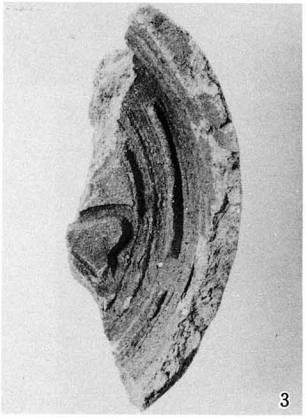
1．F－51　重弁蓮華文　　2．F－63　重弁蓮華文
3．F－52　〃　　4．F－59　〃
5．F－55　〃　　6．F－19　〃

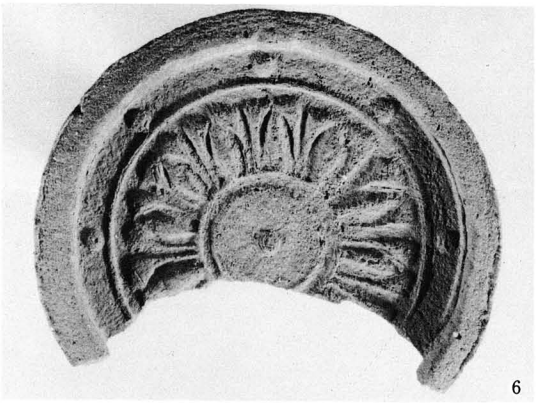
図版27　出土遺物　軒丸瓦

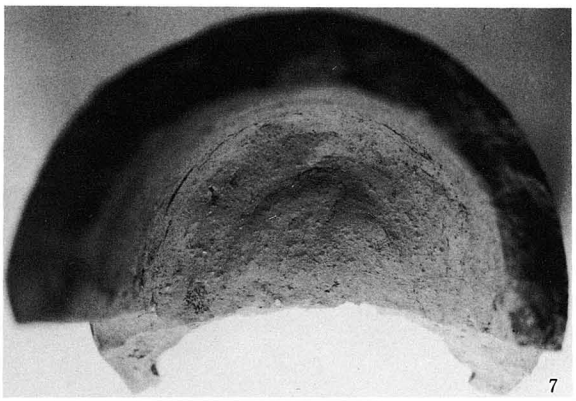


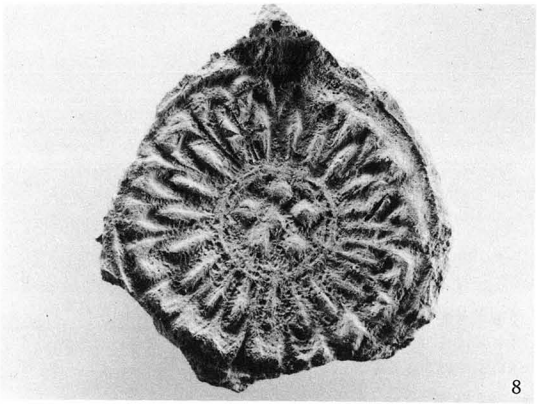
1．F－20　重弁蓮華文　　2．F－20　重弁蓮華文
3．F－3　　〃　　4．F－41　　〃
5．F－18　　〃　　6．F－18　　〃

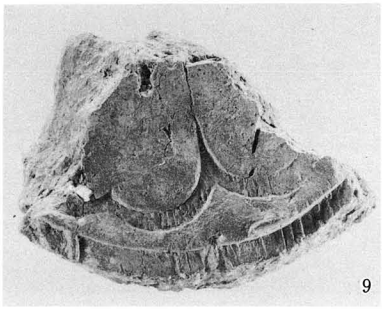
図版28　出土遺物　軒丸瓦





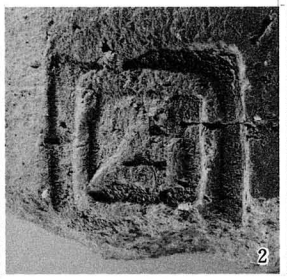


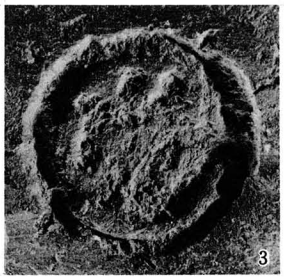


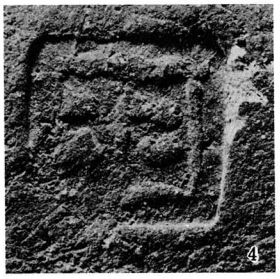


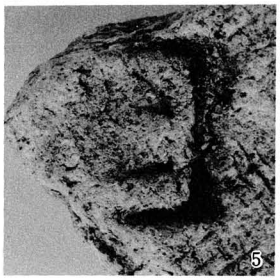
1．F－61　宝相華文
2．F－62　〃
3．F－58　〃
4．F－29　〃
5．F－27　歯 車 文
6．F－73　細弁蓮華文
7．F－73　〃
8．F－60　〃
9．F－15　桜花様文

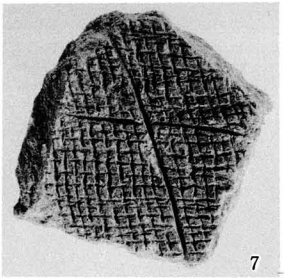
図版29　出土遺物　軒丸瓦

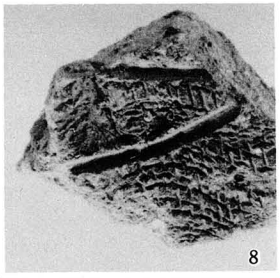


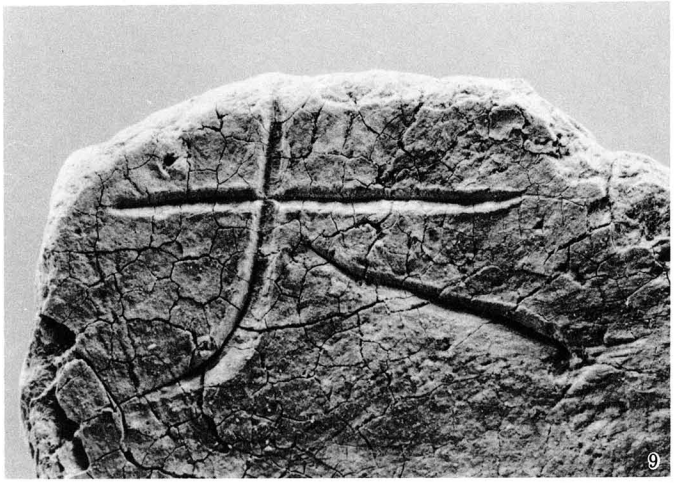


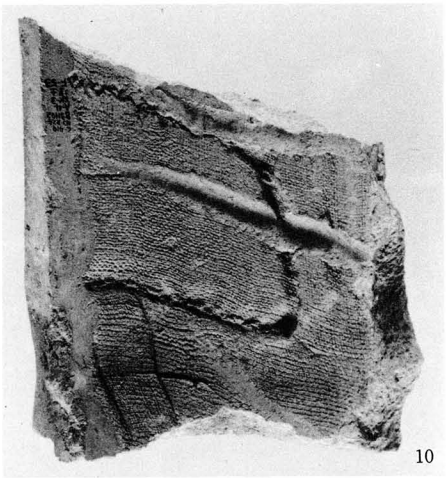




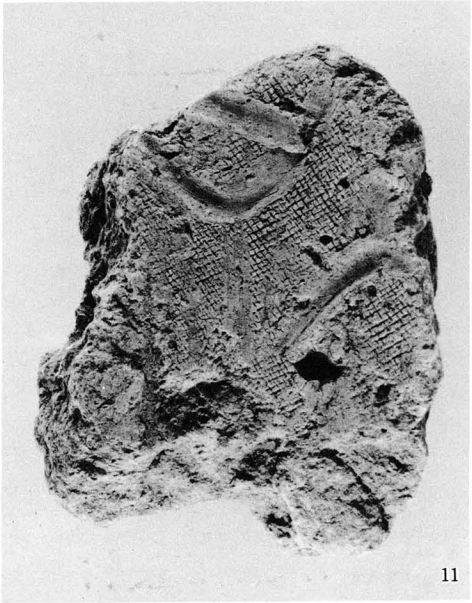


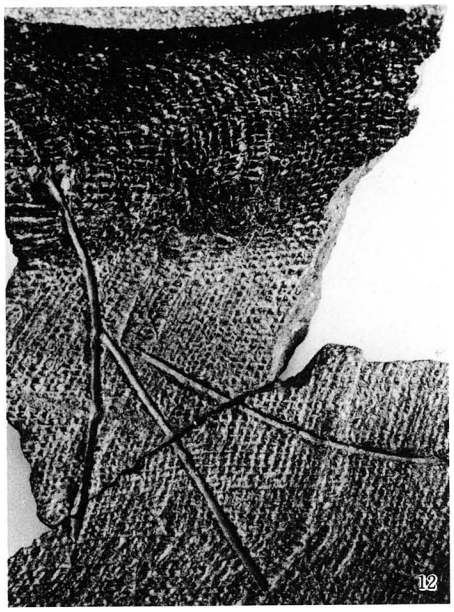




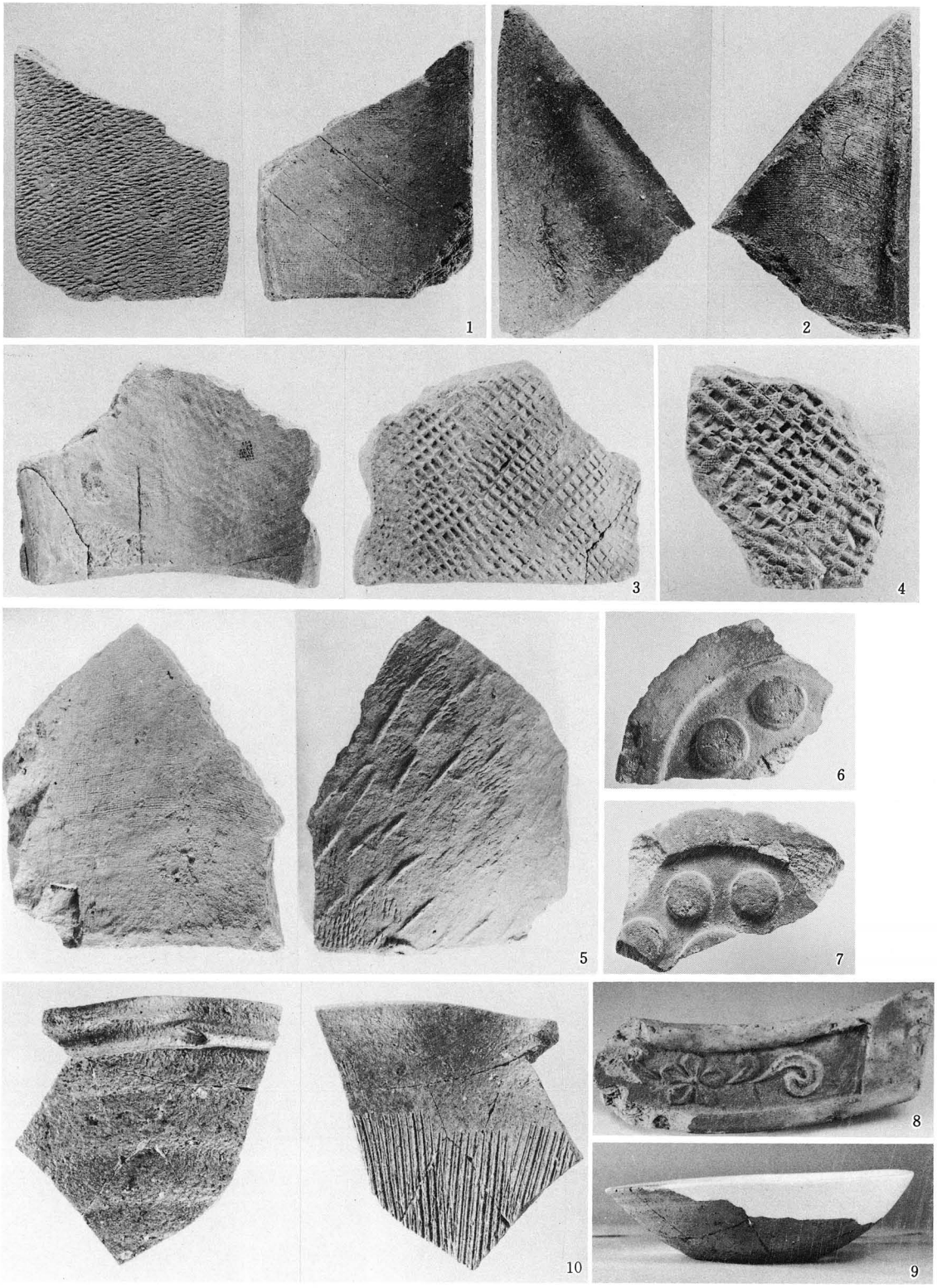


1．F－ 2「占」
2．F－ 50「万」
3．F－ 87 ？
4．F－ 64「玉」？
5．G－102 ？
6．F－ 86「未」
7．G－ 1
8．F－ 85
9．F－ 53「大」
10．G－77
11．G－41
12．F－28



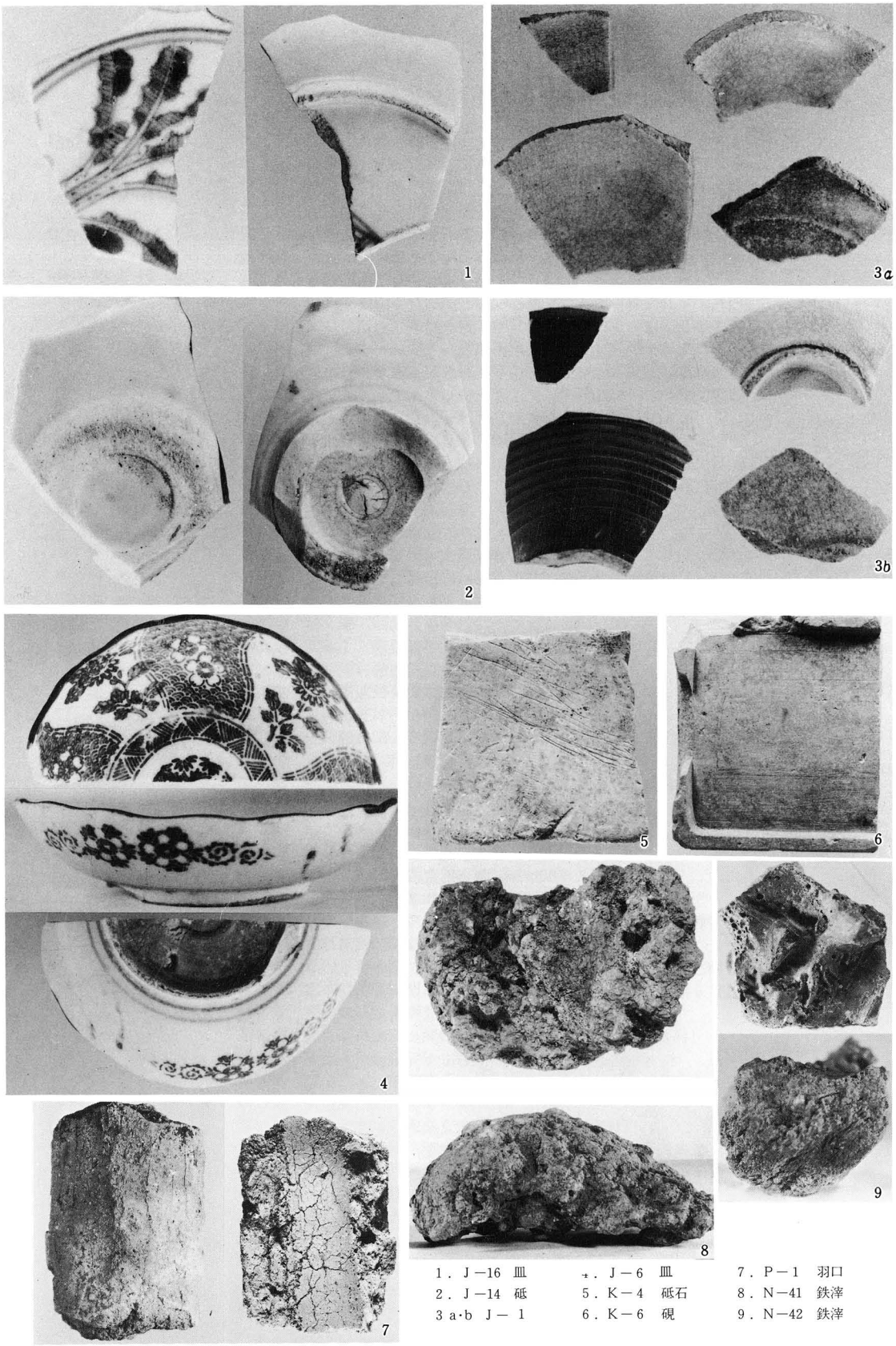


図版30　出土遺物　文字瓦



1．G－87　慰斗瓦　2．G－43　陽切り瓦　3．G－63　平瓦　4．G－48　平瓦　5．G－92　平瓦
6．F－40　近世瓦　7．F－39　近世瓦　8．G－35　近世瓦　9．D－6　土師器坏　10．J－13　陶器

図版31　出土遺物　道具瓦・平瓦・近世瓦



1．J－16　皿
2．J－14　砥
3 a·b　J－ 1
4．J－6　皿
5．K－4　砥石
6．K－6　硯
7．P－1　羽口
8．N－41　鉄滓
9．N－42　鉄滓

図版32　出土遺物　陶磁器・石製品・土製品・鉄滓

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　大沢隆夫
主　事　岩澤克輔
〃　山口　宏
〃

文化財調査係

係　長　佐藤　隆
教　諭　渡辺忠彦
〃　佐藤　裕
主　事　田中則和
〃　結城慎一
教　諭　成瀬　茂
〃　菅原和夫
〃　青沼一民
主　事　柳沢みどり
〃　木村浩二
〃　篠原信彦
〃　佐藤　洋
〃　金森安孝
〃　佐藤甲二
〃　吉岡恭平
〃　工藤哲司
〃　渡部弘美
教　諭　渡辺　誠
主　事　主浜光朗
〃　斎野裕彦
〃　長島栄一
〃　荒井　格
派遣職員　高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡ー範囲確認調査報告書ー（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和53年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡ー都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ－昭和56年度発掘調査報告書－（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報－（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡ー宅地造成に伴う緊急発掘調査－（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭ー茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書ー（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ－昭和57年度発掘調査概要－（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ－昭和57年度発掘調査報告書－（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡ー都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）

第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡－昭和58年度環境整備予備調査概報－（昭和59年３月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報－（昭和59年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ－昭和58年度発掘調査報告書－（昭和59年３月）

仙台市文化財調査報告書第63集
昭和58年度
史跡陸奥国分寺跡
昭和58年度環境整備予備調査概報
昭和59年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24－24ＴＥＬ63－1166